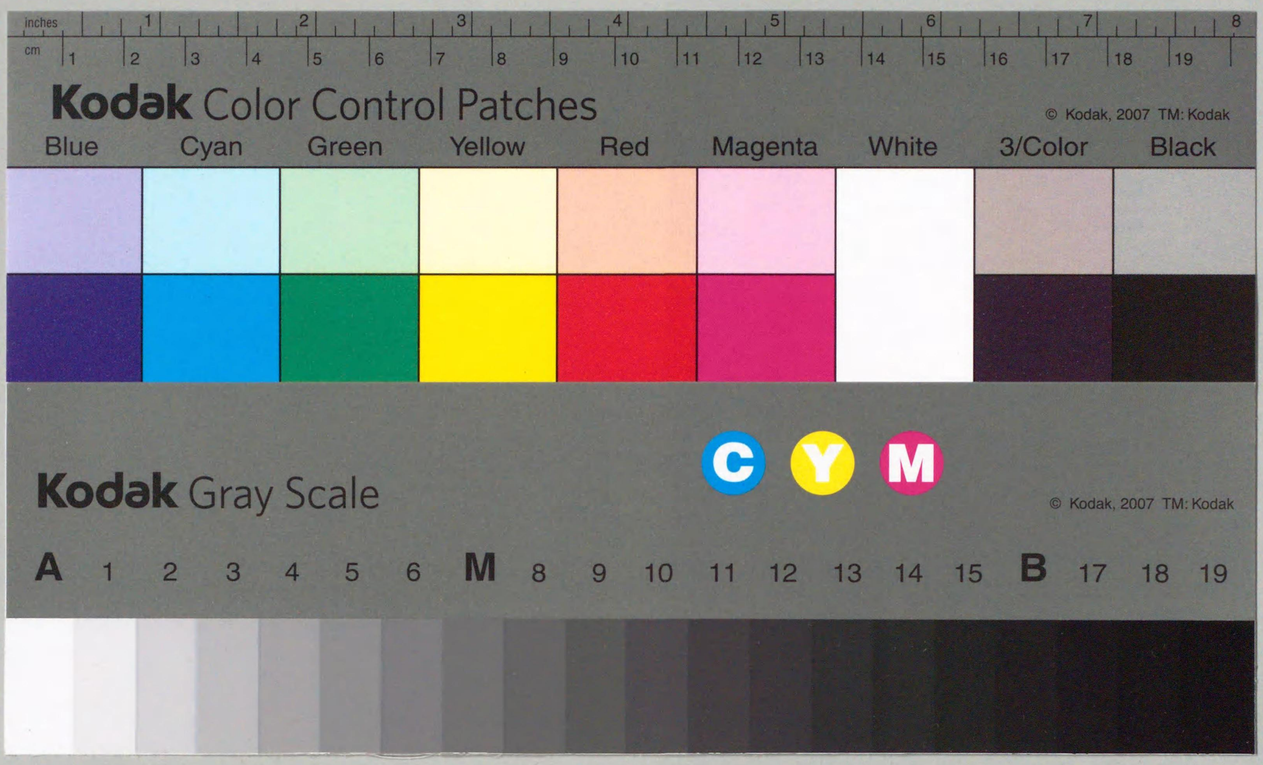


627.7-Y226s-(2)
1200700370152

山田孝雄著

櫻史

櫻書房發行

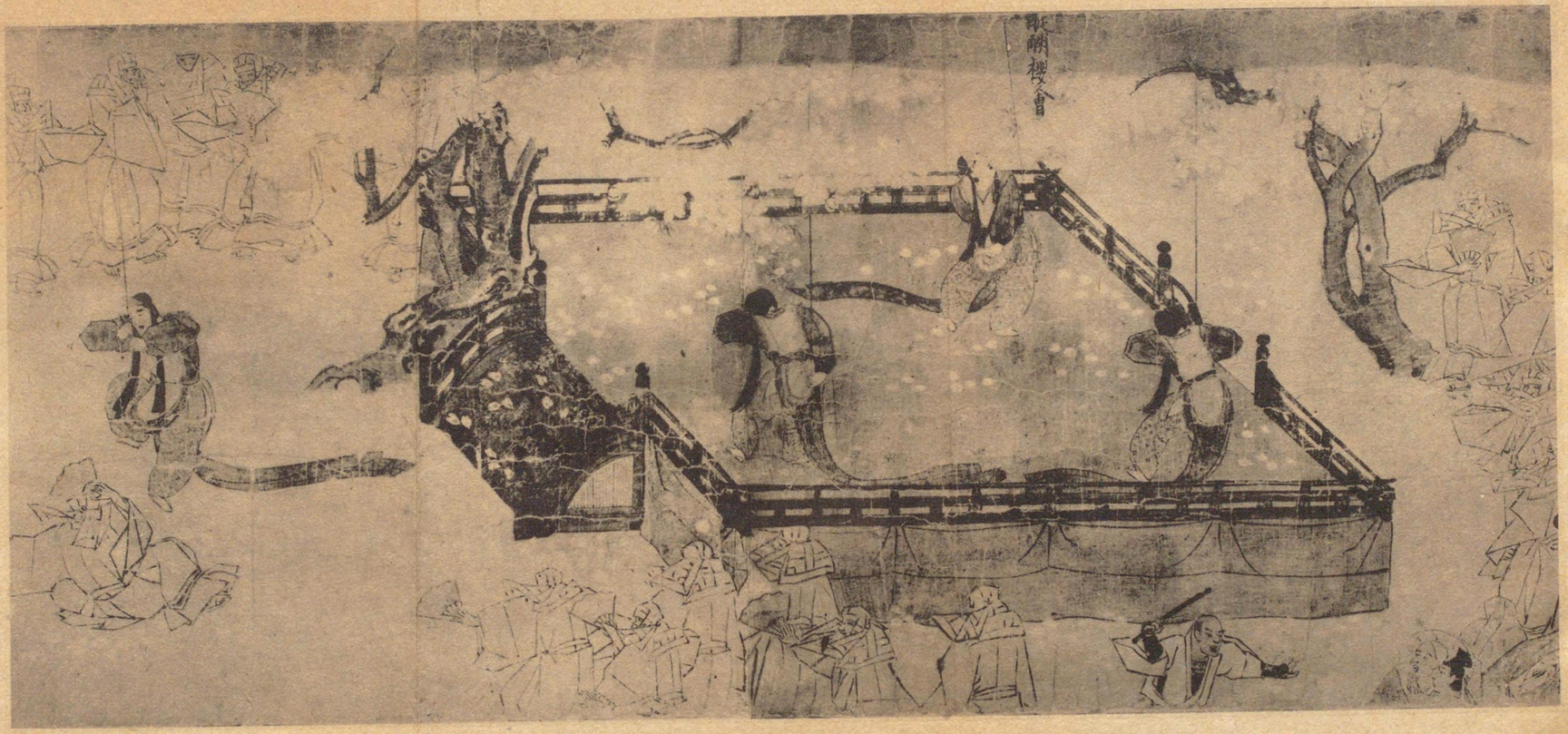
国立国会
23.4.1
図書館分館
巡回文庫

帝室博物館藏

の圖

国立国会
23. 4. 1
図書館分館

巡回文庫



天狗雙紙　醍醐櫻會の圖　　帝室博物館藏

序

櫻史まさに公にせられむとす。時正に櫻花爛漫たり。抑もこの櫻史は櫻の會の依囑により、その會の雜誌「櫻」の爲に起草したるものにして、その第二號より第十三號までにわたり、年を以ていへば、大正八年より昭和六年にわたりて僅に之を終へたるものなり。もとより學窓の餘暇又公務の少閑を利用して起草したるものにして事項の選擇當を得ず記述の繁閑一ならざるものにして之を一部の著述として見れば不完全を極めたるものなり。その終れる當時櫻の會にて出版せむといふ議も出でたる由なれど、不體裁のものなればとて辭退したるなり。かくてその後之を整頓せむことを欲したりしかど、繁忙の度一層甚しくなりて意を果すこと能はず。されど、そのまゝにて差しおくも不本意なれば、多少の補訂をなしてさしおきたりき。然るに福山秀賢氏仙臺の僑居に出入せられし節にこの稿を見て出版せばやとも言はれたれど、前述の次第によりて直ちに出版せむといふ意志も無き事なれば、これもそのまゝに打ち過ぎぬ。か

くて福山氏櫻書房といふをはじめてその手はじめにこれを出版したしと再び請はるゝに及び、辭みかねて之を提供することとなしぬ。されど、寸暇なき身はこれが爲に大なる改補をなすこと能はずして止みぬ。今日に於いては本文の終の記事以後なほ加ふべき事實少しとせず。されど、年代を本文より下すときにはなほ多少の時日を費さざれば、脫稿しかぬるを以てそのまゝにして授けたり。この故に記事不十分なる點少からず。この事は上の補訂の不十分なることと共に讀者に深く謝せざるべからず。附錄二篇は多少本文と緣あるによりて加へたるなり。以上、その事情を記して讀者諸君に之を告ぐるものなり。余はなほこの機會に於いて櫻の會がかくの如き拙き稿を勉くることなく倦むことなく、徵せられし好意と、その機關誌「櫻」の提供したる記事が、本文を爲すに著しき資料となりしことを感謝することを明かにするものなり。

昭和十六年四月御衣黃の花の盛りの時

神宮皇學館大學の居室にてしるす

山田孝雄

題簽　香取秀眞

裝幀　長野草風

櫻史目次

天狗雙紙・醍醐櫻會の圖（帝室博物館藏）……口繪
はしがき……三
上古の巻
櫻を花とのみいふことのはじめ……五
古、木花といひしは櫻花なりしこと……六
磐余若櫻宮……九
衣通姫……一二
櫻兒……一三
櫻の歌……一五
插頭の花……一九
野山の櫻……二一
屋戸の櫻……二三
懷風藻の櫻……二五
中古の巻
南殿の櫻……二七
花の宴……三二
奈良の都の八重櫻……三七
吉野山……四〇
櫻會……四二
大江佐國……四六
墨染の櫻……四九
花見……五一
櫻狩……五五
花の折枝……五七
櫻のしなぐ〜……六〇

花合……六四
櫻人……六七

近古の巻

左近の櫻……七三
庭の白雪……七七
花のくさぐさ……八二
接木の櫻……八六
嵐山と北山……八九
鎌倉の櫻……九四
繪巻の花……九八

中世の巻

左近の櫻と花の宴……一〇三

兼好法師の櫻花觀……一〇六
花のまごころ……一〇九
雲井の櫻……一一四
塔尾の花……一一六
吉野の花の嵐山……一一八
鎌倉櫻……一二一
西芳寺……一二三
赤葉の八重櫻……一二五
大原野の花……一二七

近世の巻一

花の御所……一三一
北山殿行幸……一三三
普賢堂……一三四

信濃櫻……一三八
絲櫻と彼岸櫻……一三九
花の色々……一四四
東山の花……一四六
花の下……一四八
花の謠ひ……一五二
旅路の花……一五五
不斷櫻……一五九
芳野の花見……一六六
醍醐の花見……一七〇
護花鈴……一七三
武人と櫻……一七四
やよいざ櫻……一七六

近世の巻二

勅銘の櫻……一八一
嶺の白雲……一八四
那波道圓の櫻譜……一八八
有馬凉及が櫻癡……一九〇
碁打の花見……一九一
京都の花……一九八
御室と平野……二〇〇
徳川光圀の愛花……二〇五
朱舜水と陳元贇……二〇七
三宅觀瀾の櫻花詩……二一〇
櫻の辯と櫻品……二一一
江戸のはじめの頃の花……二一四

金王櫻と衞門櫻……二一七
上野の花……二二一
花見小袖……二二五
櫻づくし……二二八
秋色櫻……二三〇
歌仙櫻……二三二
丈草が吉野賦……二三四
日見櫻と元日櫻……二三六
隅田の堤……二三九
飛鳥山の花……二四一
花の小金井……二四五
花見の御幸……二四八
佛行坊の花見……二四九
花の一枝……二五〇

大雅堂が花見……二五二
太申櫻……二五三
蘭山の花鑑と圖南の花錦……二五七
也有が飛鳥山賦……二六一
花顚三熊思孝……二六四
朝日に匂ふ山櫻花……二七五
浴恩園とさくら山……二八二
櫻宮の勸進……二八五
花譜の眞盛……二八九
櫻顚浩然……二九一
櫻花五百詠……二九四
水戸の花……三〇〇
瀧櫻……三〇二
やまとこころ……三〇六

櫻賦……三〇八
佐久良東雄……三一五
吉野川……三二一
櫻史新編……三二三

現代の巻

櫻花の災厄……三二五
櫻戸玉緒……三二九
平野知秋の櫻賦……三三二
觀櫻の御會……三三五
小金井の行幸……三三八
柳北の栽櫻……三四〇
江戸川の櫻など……三四四
開成山の櫻……三四八
江北の櫻……三五一
外つ國の櫻……三五七
新なる櫻人……三六三
櫻の會……三六五
摑筆の辭……三七二

附錄

はな……三七七
日本精神と本居宣長……三八九
大和魂の眞諦……三八九
古事記傳の精讀……三九二
道を行ふ心得……三九六
櫻の種類……四〇一

櫻史

目次

索引
書誌名……四〇三
人名……四〇九
櫻の名目……四一〇
地名……四三二

表紙・扉口繪制作　七條憲三

はしがき

櫻花はわが國民の性情の權化なり。わが櫻と同じき樹は外國になきにあらずといへどもわが國の花より麗はしく咲けるはなしとぞいふ。思へば國民の性情のこの花によりて薫化養成せられたること幾何なるべきか、蓋し測り知るべからざるなり。若しわが國に古より櫻といふ花なかりしものとせば、わが國史の成迹は果して今日の如くにてあるべきか。敷島の大和心を朝日に匂ふ山櫻にたとふるを國民がげにもとうなづくは何によりて然るか。花は櫻木人は武士といふ諺また何の故に永く生命を有し來れるか。ああ櫻は大日本國と離るべからざる花なり。苟くもわが國民の性情を知らむと欲せば勃窣の理を討尋せむよりも朝日のただささす向つ尾に咲き滿てる山櫻花をあかず詠めて端的に眞相を領會するに及かざるなり。近時國花といふ語行はれ櫻又わが國花なりと稱へらる。されど、その國花といふ語の意義は外國にていへるものよりは

遙に緊密なる意義あるべきを忘るべからず。

上古の巻

櫻を花とのみいふことのはじめ

櫻を花とのみいふことは今は歌人間にのみ行はるることのやうに思へる人稀ならず。然れども、見よ、かの三春の行樂の中民間にて最も樂しとせるは花見にあらずや。花見とは花を見るなり。花は卽ち櫻花にてあるなり。これ國民の至情より出でたる聲なり。苟も櫻を國花なりと唱ふる人にありては櫻といはで花とのみいへる古人に倣ひて以て之を賞美尊重する至情を表すべきにあらずや。今かく櫻を花とのみいへることのはじめを尋ねむ。

櫻はわが國自生の樹木なれば太古よりありしこと疑ふべからず、太古よりありしものとせば、その花のうるはしさを太古の人もめではやしつらむことも今

910
Y

日と異ならざるべきなり。然るに太古には櫻といふ語の存したりしか否かは古史之を記さず。この故に人多くは之を疑ふ。然れども、凡そ世界の事はじめは混沌にして後に剖判するを通則とす。されば櫻の語なしとても櫻の花の咲きしこと、又そをめでしことなしとすべからず。況んや花といへば櫻といふことと今日にも行はるるを以て溯りて考ふれば、太古混沌の世に花といへるが櫻にてありしことなかりしとすべからず。花といひてまさしく櫻花をさせることは嵯峨天皇が神泉苑に行幸して花宴を催させたまひしことを以て史上にはじめて見るところとす。これより後花といひて、櫻をさすこと汎く行はるるに至り、連歌、俳諧などには月の坐、花の坐といひ、その句の位置までも定まるに至れり。今それらの沿革は後に譲り、これより以前に花といひて櫻をさししことなかるべきかを考ふべし。

古、木花（このはな）といひしは櫻花なりしこと

天照大御神の天孫として、この國に君臨ましましゝ天津日高日子番能邇邇藝能命（あまつひたかひこほのにに ぎのみこと）の大后（おほきさき）として木花之佐久夜毘賣（このはなのさくやびめ）又木花之開耶姫（このはなのさくやひめ）とかけり、富士山の官幣大社淺間神社の祭神なり。）ましませり。この大后の御名の佐久夜は櫻なるべきこと先哲略定論あり。按ずるに古語「ラリルレロ」を「ヤイユエヨ」に轉ずることあるはその證少からずして今人また之を傳ふるものあり。たとへば「所謂」の二字を「イハユル」といへる如きこれにして本義は「イハルル」なり。果して然りとせば、櫻の語の古史に見えたるは之をはじめとす。かくてその「木花」もまた汎く樹木の花をいふ語にてありながら一面には、かぎりて櫻の花をさすものなりと論ぜられたり。されば單に花といひて櫻花をさせる證は未だあらはれずといへども木花卽櫻花なりしことは信ずべきに似たり。

古今集の序に博士王仁が仁徳天皇に奉りし歌として、

難波津にさくやこの花冬ごもり
　今を春べとさくやこの花

といふを載せたり。この歌中古に手習のはじめに用ゐし歌にして、人口に膾炙

せり。この歌の「この花」も亦おなじく櫻花なるべしと論ぜらる。然るに往梅とせる説あり。これ梅は恐らく支那などより傳へしものにして、之を翫賞するも支那の風に基づくものなれば何となく王仁の漢學者なるに連想せられしに基づくものならむ。されど王仁が梅を傳へしことも、梅を賞せしことも、難波宮に梅を植ゑられしことも何等の證を見ず。この花の語はまさしく古來の國語にして櫻花をさせること疑ふべからず。按ずるに萬葉集第二十巻に大伴家持が難波宮の繁榮を稱へ奉りて、天平勝寶七歳二月十三日よめる歌を載す。その歌に、

すめろぎのとほきみよにも、おしてる難波の國に、天の下しらしめしきと、今のよにたえずいひつつ、かけまくもあやにかしこし、かむながらわが大王（おほきみ）の、（中略）しきませる難波の宮は、（中略）こと見ればうべし神代ゆ、はじめけらしも。

といひ、その反歌に、

櫻花いまさかりなり難波の海
おしてる宮にきこしめすなへ

とあり。ここに神代といへるは難波の京のはじめ仁徳天皇の御代をさせるなり。梅を賞することは奈良朝の頃上流社會に盛に行はれたるものなれば、若しこの宮に植ゑさせたまひしものならば、たとへ當時にこの木傳はらずとも、之に一言及ばざることあるべしや。然るに當時の愛梅黨の巨擘たりし大伴旅人の嫡子たる家持が一言ここに及ばざることを以て考ふれば、かの木の花即ち櫻花たりしこと殆ど疑ふべからず。惟ふに難波の地の櫻に適してあることは今の大阪の櫻を見ても知らるる如く家持がよめる時正にその花眞盛にてありしことと明かにして、そのはじめ仁徳天皇の御世にこの花の大宮の邊にさきほこりてありしを見て王仁も之になぞらへて君徳を頌し奉り家持亦王仁の歌を下にふくみてかくよめりしにこそあらめ。

磐余若櫻宮

天皇の御稜威を花の盛りに比ふるはわが國民のおのづからに起すべき思想

なり。されば上の如く家持が難波宮を稱ふるにも現に盛りなる櫻花をとりたりしならむ。この思想は萬葉集巻三にある

青丹よし寧樂の京は咲く花の
薫ふが如く今盛りなり

といへる太宰少貳小野老が歌にもあらはれたり。この咲く花は何の花ともいはざれど、櫻をさせるものと我は解せむ。

櫻の美はかくて終に宮城の名に用ゐらるるに至れり。日本書紀によれば、神功皇后の磐余の地に營まれし宮をば若櫻宮と名づけられし由なり。然れどもこの神功皇后紀の文は後人の攙入なるべしと史家殆ど一致して論ぜり。されば余は今姑く、之に從ひて次なる履中天皇の宮城につき語らむ。

履中天皇の宮は之を磐余稚櫻宮と申す。その趾今の大和櫻井町の附近ならむといふ。かく名づけられしはげにも櫻の花の美はしき物語にこそよれ。天皇卽位の後、六年十一月朔に兩枝船を磐余の市磯池に泛べて皇妃と各分れ乘りて遊宴したまひしことありき。この時膳臣余磯御酒を獻りしに、櫻の花御盞に落ち入れり。時ならぬ花にしあれば、天皇異しみたまひ、物部長眞膽連を召してその花を尋ね見てこと仰せらる。是に長眞膽連、獨花を尋ねて掖上室山に獲て獻りしかば、天皇そのめづらしきを歡びたまひて卽ち宮の名としたまひきといふなり。稚櫻とは蓋しその春に先だちて花ありしが故に名づけられしならむ。この時、その花によりて長眞膽連の本姓を改めて稚櫻部造と賜ひ、膳臣余磯には稚櫻部臣の號を賜ひき。

この稚櫻部造は後に聞ゆること稀なれど、稚櫻部臣は天武天皇の御代に若櫻部朝臣とせられ、國史の上にその一統の名屢見ゆるのみならず、若狹國はこの氏の領國としてその名を負ひたる國にぞある。抑も膳臣はその祖を磐鹿六雁命といひ、景行天皇の朝に御膳に奉事せし時の功を以て膳臣の姓を賜ひて長く御膳に奉仕し、志摩國と若狹國とを領しき。これその地は漁撈の利多く御贄を奉る國なればなり。その膳臣の一流稚櫻部臣の號を賜ひてよりその領國をも名づくるに至れりしにて「ワカサ」は「若櫻」の略なること疑ふべからず。その證は國造本紀に允恭天皇の朝に膳臣の祖佐白米命の兒荒磯命を若狹國造と

定め賜へる由記せるにて明なり。「荒礪」と「余磯」とは文字は違へど、いづれも「アレシ」といふ語に宛てたる文字とおぼゆ。この膳臣は後高橋の氏を賜ひて志摩國また永く高橋氏を以て國司とせられたり。

上の如くなれば櫻は宮城の名より延いて臣家の號にも國の名にも及ぼしたり。櫻あに國史に關する事なしといふを得むや。

衣通姫

櫻花の美は精神の美にも身體の美にも比へつべし。されば之を妖艶なる美人に比ふることこれ亦自然の事といふべし。應神天皇の御孫に弟姫と申す美人ましませり。容姿絶妙にして比無くその艶色衣より徹りて照れり。この故に時人名づけて衣通郎姫（そとほりのいらつめ）といふ。これ和歌三神の一と崇められたる衣通姫なり。この姫允恭天皇の寵を辱うしたまひしが或る事情によりて藤原宮といふに離（さん）りてましませり。ある時天皇藤原に行幸あり、密に衣通姫の消息をみたまふにこの夕、衣通姫は天皇を戀ひたまひ、獨居にたへずして歌ひて曰く、

わがせこが來べき宵なりささがにの
蜘蛛の行ひ今宵しるしも

と。ここに天皇この歌をききたまひて感じましまして御製ありき。明朝に天皇井の傍の櫻花を見たまひてまた御製あり。その御製に、

花ぐはし櫻の愛（め）でこと愛では
早くは愛でずわが愛づる子等

と。即ち衣通姫の艶麗なるを櫻花のうるはしきに比べてよませられしなり。これ實に天皇即位の八年の春二月の事にして世に傳へて美しき物語とせり。

櫻兒

美人を花にたとへ櫻にたぐふるはこれより後屢みえたり。かの萬葉集巻十三にいへる「つつじ花香ひをとめ、櫻花さかえをとめ」の語にても知らるべし。

さても衣通姫の物語は長くも天皇の御事にかかれり。ここに卑賤の娘子ありき。その名を櫻兒といへり。その容貌の美にして艶なりしこと想ひやるべし。時に二人の壯夫ありて、共にこの娘に物いはむとし、命をすてて相あらそへり。かかりしかば、この娘歎きていへらく、「古よりこのかた未だ一人の女の二の家に往くといふことを見ず聞かず。今二人の壯夫の意和めがたし。わらは自ら死にてこの相害ふ心を息めしむるよりは道なからむ」といひて林に入りて自ら死にき。ここに二人の壯夫哀しみ歎けどせむすべもなし。せめてのあまりに各その心緒を陳べて歌をよめり。その一人の歌、

春さらば插頭にせむと我が念ひし
　櫻の花は散りにけるかも

今一人の歌、

妹が名にかゝせる櫻花さかば
　常にや戀ひむいや年毎に

げにや年々に咲く櫻の花を見る毎に、その名を思ひ出て、その顏ばせをしのびて常しへに歎きけむ古の壯夫の思ひやいかに。あはれこの櫻兒よ。容顏の美しきのみにあらず、その心の情にみちてしかも潔きこと、げにもわが櫻の兒たるに恥ぢざるよ。この物語は載せて萬葉集卷十六にあり。大和國高市郡大久保村に娘子塚といふあるぞこの櫻兒の墓なると云ひ傳ふとぞ。

櫻の歌

允恭天皇の御製は櫻の歌の史に見えたるはじめとす。これより後の櫻の歌は萬葉集にあるものを古しとすべし。今この集なる櫻の歌につきて大概を語らむ。

萬葉中にある櫻の歌は少しとにあらねど、之を梅をよめる歌に比すれば數劣れり。この事先づ、世人の注意を乞はざるべからず。卽ちその歌すべて四十三首にして梅をよめるは天平二年に太宰帥大伴旅人が館にて梅花を賞せし時の歌三十二首及び後に之に追加せる歌四首（以上第五卷）更に十年の後家持が追加

せる歌六首(第十七巻)並に一首(第十九巻)を主としてすべて百十首に及べり。かく櫻と梅とに數の大差あるは當時上流社會に梅のもてはやされし度櫻よりも過ぎたるをあらはせるものと見ざるべからず。而してその梅は大抵は園樹なりしこと明かにして野生のものと見ゆるは殆どなし。蓋し、この梅は當時外來の珍花として、はた支那風心酔の餘響として當時識者の間に賞翫せられしが故なるべし。

之を以て見れば、萬葉集は櫻を謳歌せる集とは見られざるなり。然れども、之を各巻に分ちて見れば、先づ一、二、四、十四、十五の五巻は櫻も梅もなければ之を除き、他の十五巻はすべて櫻の歌を有せるに、梅の歌はなほその外の七、九、十一、十二、十三、十六の六巻にはなくして他の九巻のみに存せり。これは一局部主としての上流の社會に梅花心酔の度の強かりしことを語ると共に、櫻が一般に賞翫せられしとは大いに趣を異にするものなるを見る。

梅を謳歌せる歌人も日本人なれば、さすがに梅のみに執着せずして次ぎてさくべき櫻を連想せるものなきにあらず。たとへば、かの大伴旅人が館にて梅花を賞せる人の歌にも、

梅の花さきてちりなば櫻花
つぎてさくべくなりにてあらずや

といひ、又巻十の歌に、

鶯の木傳ふ梅の移ろへば
櫻の花の時片まけぬ

とうたへるが如きこれなり。

かかる時代なりといへども、日本人の本性として切なる思ひは櫻によせて述べられたれど梅に對してはさることとよめる歌殆ど見えざるなり。その櫻によせたる歌の二三を次にあげむ。

藤原廣嗣が櫻花を娘子に贈れる時の歌、

此花の一よの間に百種(ももくさ)の
言(こと)ぞこもれるおほろかにすな

一朶の櫻に千萬無量の思をこめたる情思ひやるべし。又越中守大伴家持が病

みふせる時に、掾大伴池主が報じ贈れる歌に、

山かひにさける櫻をたゞ一目
君に見せてば何をか思はむ

家持之にこたへて曰く、

足引の山櫻花一目だに
君とし見てばあれ戀ひめやも

櫻花によせて友を思ふ情躍然として言外にあふる。又讀み人はしらねど、羈旅にありては櫻によりて家郷を思ひ、

櫻花開きかも散ると見るまでに
誰かもこゝに見えて散り行く

とよめるなど、國人としての至情は實に櫻によりて發せられしなり。

時移りて平安朝の時代に入れば、櫻の歌は壓倒的に勢力を有するに至る。そのはじめの勅撰集たる古今和歌集を見るに、その春の歌一百三十三首のうち櫻を詠めるもの七十首、梅を詠めるもの十八首、ただ花とよめるもの十二首そのうち梅と思はるるもの八首、櫻と思はるるもの四首、卽ち櫻はその過半を占め、梅は櫻の約三分一に止まることとなれり。かくして漸をなして新古今集の頃に至れば、春の歌一百七十四首のうち櫻をよめるもの八十五首、梅をよめるもの十七首、而して花とのみいひて櫻をよめるもの實に五十首を超えたり。かくて櫻の勢力のいよ〳〵まさりゆくさまを見るなり。

插頭の花

凡そ時の花を頭に插してその美をめではやしたりしは上古の風俗にてありき。男子は之を冠にさしなどせしこと髻華（ウズ）の語にても知らるべく、又冠の心葉にても知られたり。さればかの櫻兒を傷みてよめる歌にも、插頭にせむと念ひし櫻の花といへるなり。

集中櫻をよめる歌に、

をとめ等が頭插のために、みやびをの蘰のためと、しきませる國のはたて

に、開きにける櫻の花の、にほひはもあなに。

といへるも亦之をあらはせり。新古今集に山邊赤人の歌としてあげたる

百しきの大宮人は暇あれや
　櫻かざして今日もくらしつ

といへるは世人みな知り、いかにも御國の大宮人の面影偲び出でられてゆかしき思ひあらしむるなり。然るにその本源たる萬葉集にはこの歌「野遊」と題して、

百しきの大宮人は暇あれや
　梅をかざして此間につどへる

とありて櫻にあらで梅なりけり。惟ふに此頃は先にもいへる如く大宮人は漢風に染みて梅をかざして得意がりしにこそあらめ。かくてかの冠の心葉として用ゐらるる插頭の梅も恐らくはこの頃にはじまりしものと思はれたり。要するに萬葉集の頃は櫻の得意時代とは見えざるなり。

野山の櫻

櫻はその自然なる野山にあるを賞するを以て普通とすること古今にかはらず。今萬葉集によりて當時のさまを見む。

山の櫻を賞するにつきて當時櫻の名所としてあらはれしは都のありし大和にては後までも名高き高圓山を主とす。

雉なく高圓の邊の櫻花
　散りてながらふ見む人もがな

次には香具山、佐紀山、佐保山あり。ここに面白きは後世紅葉の名所とのみ思はれたる龍田山がかの高圓山にもまさりて花の名所にてありし事なり。これこの山は大和より攝津さては西國に行通ふ要路にてありしによれるならむも、櫻の盛なる所ならでは誰かはこれを歌ふべき。今龍田山の櫻をよめる歌をいはむか、慶雲三年春三月諸卿大夫等難波に下れる時の歌五首、天平四年藤原宇合が

西海節度使の任に赴ける時高橋蟲麿がよめる歌、さては、大伴家持がかの難波宮に下りし時龍田山の櫻を惜みてよめる歌なり。その家持の歌、

龍田山見つつこえこし櫻花
　散りか過ぎなむわがかへるとに

京ならぬ所にては紀伊の絲我山、播磨のたゆらぎの山ぞ櫻の名所として傳はれる。

所の名をあげずして山の櫻をよめるこそ最も多けれ。そが中に山邊赤人の歌、

足ひきの山櫻花日竝べて
　かく開きたらばいとこひめやも

大伴家持が館にて宴せし時の歌、

今日の爲と思ひてしめし足引の
　尾上の櫻かくさきにけり

大方の山櫻をわがものがほによめることのをかしさよ。

野邊にては春日山のあたり御笠山のふもとなる春日野ぞ櫻の多かりし所と見えたる。そが歌

見渡せば春日の野邊に霞立ち
　開きにほへるは櫻花かも

屋戸の櫻

櫻を賞する情は野山にあるままに詠むるに飽き足らずして之を家處（やど）の邊に移し植うることをなさしむるに至るは自然の勢なり。かの允恭天皇の詠みたまひし櫻も井の側にありしとあれば、人の植ゑしものにこそありけめ。萬葉集第八に厚見王が久米女郎に贈れる歌に、

屋戸に在る櫻の花は今もかも
　松風いたみ地にちるらむ

とあるはまさしく庭前の櫻なり。又巻十に、

春雨に爭ひかねてわが屋前の
　櫻の花はさき始めにけり

とあるもこれを證せり。

ここに面白きは天平二十年の頃越中掾たりし大伴池主が越中國府なるその宅に櫻樹を植ゑて賞翫せしことなりとす。この事は萬葉集第十八に載す。卽ち池主が越前掾に轉任せし後、もとの上官たりし越中守家持に三首の歌を贈れる中の一首に「屬物發思」と題して、

櫻花今ぞ盛と人は云へど
　我はさぶしもきみとし在らねば

とありしに家持が應へて、

わがせこがふるき垣内の櫻花
　いまだふふめり一目見にこね

といへり。この歌に家持自ら注して曰はく、「一答屬物發思兼詠云遷任舊宅西北隅櫻樹」と。池主が口を開けば櫻花をいふことその愛する度の強かりしを知ると共に、かく、として賞せしをも知るを得たり。當時梅花謳歌黨たりし大伴氏の一族に殊に櫻花を愛せし池主その人ありしは頗る注意すべき事なり。

懷風藻の櫻

懷風藻はわが國最古の詩集にして弘文天皇の御製をはじめとして奈良朝の半頃までの詩一百二十篇を載せたり。今之を繙くにその春の花をいへるもの自ら支那の風に倣ひて最も多きは梅花にして次は桃李なり。これ詩人が隋唐の風に倣へる上は自然の事にして、かの國にわが櫻花をよめる如き詩あるべくもあらねば、ここに櫻の花を求むるは殆ど望むべからざるに似たり。然るにここに明かに二首の存するを見る。その一は正五位上近江守采女朝臣比良夫の侍宴の一首にしてそのうちに次の句あり。

淑景蒼天麗　嘉氣碧空陳　葉綠園柳月　花紅山櫻春

他の一は左大臣正二位長屋王の初春於作寶樓置酒の一首にして、

景麗金谷室　年開積早春　松烟雙吐翠　櫻柳分含新　嶺高闇雲路
魚驚亂藻濱　激泉移舞袖　流聲韵松筠

とあるものなり。この采女朝臣比良夫は文武元明の二朝に仕へし人なり。長屋王は天武天皇の御孫にして文武天皇の朝より元明、元正、聖武の三朝に歴事し、天平元年に事に坐して、死を賜はりし人なり。その「作寶樓」は蓋し當時奈良の京の東邊なる佐保の地に營みし樓閣にして、この王を佐保大臣といふもこの地に住みしが故とぞきこえし。この佐保の地は萬葉集に「大宮人の家と住む佐保の山」と詠ぜし地にして、その詩中の松、柳、櫻はその眺望中にありしものなること著しく、そが中にも柳は行樹なりしことは萬葉に「佐保道の青柳」の語あるにて知られたり。されば、之に對せる櫻はた行樹たりしことなしとはせざるなり。平安城に至りては明かに柳と櫻と都大路の行樹とせられたりしがその端は蓋し奈良の京、はたその以前に發したりしにあらざるか。

今我等はこの二人が當時の詩人が花といへば、梅はた桃李をいへる中に立ちて國の花たる櫻を歌へるを見て喜びの念に堪へざるなり。

中古の巻

南殿の櫻

わが櫻史は今や奈良の朝を出でて平安の朝に入らむとす。かくてこの平安の都と共にあらはれしは南殿の櫻なり。

南殿とは禁中の紫宸殿の俗名なり。殿の前庭御階の東西に櫻と橘とを植ゑられたり。これぞ名高き左近の櫻右近の橘なる。かく前庭にこの二樹を植ゑられしはそが殊にめでたき植物なればにこそはありつらめ。さてもこの事いつの御代よりはじまりけむ。

古事談に曰はく

南殿櫻樹者本是梅樹也。桓武天皇遷都之時所被植也。而及承和年中枯失。

仍仁明天皇被改植也。其後天徳四年九月廿三日内裏燒亡燒失。仍造内裏之時所被移重明親王式部卿家櫻木也。件樹木ハ吉野山櫻木云云

と見えたり。さてはもと梅樹なりしが櫻にかはりしものと思はるるが、その櫻となりしは何時頃にや。禁祕御抄に曰はく、

南殿櫻

有紫宸殿巽角。是大略自草創樹歟。貞觀此樹枯自根繼萠。坂上瀧守奉勅守之枝葉再盛云云

と。三代實錄貞觀十六年八月廿四日の條に曰はく、

廿四日庚辰。大風雨。折樹發屋。紫宸殿前櫻、東宮紅梅、侍從局大梨等樹木有名皆吹倒。云云

と。これによれば貞觀以前に既に櫻樹なりしこと明かなり。

按ずるに、續日本後紀承和十二年二月の條に曰はく、

二月庚寅朔天皇御紫宸殿賜侍臣酒。於是攀殿前之梅花插皇太子及侍臣等頭以爲宴樂。

とあり。この梅花の事は、同月二十三日の條にも見えたれば櫻の誤寫にはあらず。かくてこの前嵯峨淳和の二朝に既に花宴の御催はありきといへども紫宸殿の櫻の事見ることなし。之を以て推すに、この頃までは確かに梅樹にてありしがたまたま枯れたりしかば、そのかはりにとて改めて櫻樹とせられしならむ。されば、かの古事談に仁明天皇の改め植ゑられきといへるは實を傳へたるならむ。

之を以て思ふにかの梅は奈良朝に上流にもてはやされしこと既にいひつる如くなれば、自ら宮中にも賞翫せられて橘と共に南庭にうゑられしを遷都の際もその形式のままにうゑられしが、この仁明天皇の朝に改まりて櫻となりしならむ。これ實に平安朝が櫻花全盛時代となりしを證する大なる實例なりといふべし。

橘と櫻とを相對せしめて植ゑられしはただ色と香とを賞美せさせ給ふに止まらず、なほ一層深き眞意こそはありつらめ。今推しあてながら考ふるに、橘は外國傳來の名ある植物にして色よりも香の著しきを以てめでられ、更に亦果實

も賞せられたり。しかのみならず常磐木なり。櫻は日本固有の名木にして色の麗しきを以て知られたり。かくて外來と固有と、色と香と、花と實と、落葉樹と常磐木とさまざまに相對するを見れば、實にも心深きとりあはせよと思はぬ人もあらじ。清涼殿の御壺なる吳竹河竹も同じく竹ながらこの心地のあらはるるなり。吳竹は吳國傳來の珍しき竹にして節しげく、葉こまかきものなり。河竹は今の女竹にして我國に到る所にあるもの、節疎に葉亦大なるものなり。古の人の用意の深きを見るべし。

さても南殿の櫻は天德の火災に燒けて後吉野山の櫻の種なる木を植ゑられしこと上に述べたる處なるが、これも度々燒亡に及べり。禁祕御抄に「其後度度燒失。毎度栽之近樹、堀河院御宇已來木也」とかかせ給へるを見て知れ。玉葉に曰く、

（建久二年）三月十四日竊向南殿櫻花之粧實動思驚目者也。此樹天曆御時被植之舊木燒失故也。其後堀河院御時又被植之。時範奉行植之。當時之樹卽是也。

その樹の見事なりしこと花の盛りなりしこと以て想像すべし。

平安の內裏の櫻は南殿のみにあらず。清涼殿の前にもありき。この櫻につきては本朝文粹に載せたる菅原道眞公の「春惜櫻應製」の文によりて委細を知るを得。

承和之代、清涼殿東二三歩有一櫻樹。樹老代亦變、代變樹遂枯。先皇御曆之初、事皆法則承和。特詔知種樹者移山木備庭。移得之後、十有餘年、枝葉惟新、根莖如舊。我君每遇春日每及花時惜紅艷以叙叙情、翫薫香以廻恩盼。（下略）

これによりて見れば、これも亦仁明天皇の御世に初めて植ゑられしを見るべし。この事先づ櫻花黨の記憶すべきところなり

以上の外なほ仁壽殿の東庭にもありき。梨樹を以て名づけられたる梨壺卽ち昭陽舍も亦櫻少からざりしなり。さては東宮の雅院、又建春門、宣秋門の前にも櫻ありき。櫻花國の古の宮城の春の眺や如何なりけむ。

花の宴

櫻の南殿の梅の位置に代りしは卽ち國花たる名譽を恢復せしものなるが、之が漸をなしたるは實に花の宴なりとす。

花の宴とは櫻花を賞して詩歌管絃を歡びたまふ御會なり。そのはじめはいつなりけむ。日本後紀、弘仁三年二月の條に曰はく、

辛丑（十二日）幸二神泉苑一覽レ花。樹レ命二文人一賦レ詩賜レ祿有レ差。花宴之節始レ於レ此矣。

これによれば、實にもこの嘉會は嵯峨天皇の御發意にてはじめられしものといふべきなれ。

花の宴はこれより後屢催されたり。弘仁六年二月廿八日に又神泉苑にて行はれ、同十四年二月廿八日には賀茂の齋院有智子內親王の山莊に幸してこの宴を催され文人をして春日山莊の詩を賦せしめられき。この時有智子內親王芳紀正に十七歲。制に應じて七言律詩を賦して奉らしめたまひしが、天皇之を嘉賞して詩を下したまひ、なほ文人を召す料として封百戶を賜ひて奬勵せしめたまへりき。內親王は天皇の皇女學才に長じたまへり。性また貞潔にして四十一歲の齡を保ち給ひき。才色兼備の妙齡の皇女と櫻とげにも美しき對照なるよ。あはれ之を描き出でて櫻花の爲にその美を煥發すべき妙手や誰。

嵯峨天皇御製の賦二櫻花一詩一首、凌雲集に載せてあり、何時の花宴の時にかよませたまひしならむ。

昔在二幽岩下一　光華照二四方一　忽逢二攀折客一　含レ笑宜二三陽一　送氣時多少　乘レ陰復短長　如何此一物　擅二美九春場一

「擅美九春場」とはげにもこの花の爲に知己の言といふべきなり。天皇は漢學に長けさせたまひ、文詩にも通ぜさせ給ひ、よろづからざまの御營みもなきにしもあらざりしが、ここに櫻といはで花と仰せられ、櫻の宴といはで花の宴と名づけさせたまへること櫻の爲にはげにも千載の知己とも稱へ奉らざるべからざるなり。

嵯峨天皇は櫻をさして花とのみ宣ふばかりめでさせ給ひ花の宴も屢行はれ

しこと上に述べしが如くなれど、未だ宮中にて催されしことなかりしが如し。宮中にての花の宴は淳和天皇の天長八年二月に催されしを史に見えたるはじめとす。

乙酉(十六日)天子於掖庭曲宴、翫殿前櫻花也。后宮辨備珍物。皇太子妃下源氏太夫已上得陪殿上。特喚文人令賦櫻花。云云(類聚國史)

掖庭は後宮の義なり。蓋し、常寧殿をさせるなり。

天慶八年光孝天皇即位せらるるや仁明天皇の舊制に則らせられ櫻花等もまた榮えたりしこと前にあげし菅公の文にて知らるるところなるが、その事は明かに三代實錄の同年二月廿八日の條にいへり。かくてこれより櫻花また勢を有する世となれり。宇多天皇亦先皇の素志をつがせたまひしことこれ亦かの菅公の文に見えしところなり。而してかの菅公の文は實に寛平七年二月の花宴の時に奉られしものなるが如し。日本紀略同年二月の條に、

二月□日公宴。賦春翫櫻花之詩。

とあるこれなり。又同三月の五日にも公宴ありて「月夜翫櫻花」題を賜はりき。

醍醐天皇の朝には延喜四年、延喜十七年に行はれしこと史に見ゆるが、延長四年には寛平の例を逐ひて清涼殿にて行はれ、朱雀天皇の御宇には天慶四年に行はれしこと見えたり。村上天皇の御宇には屢見えたり。即ち天暦三年、天德三年、應和元年等に行はれ、康保二年にはかの南殿の櫻を移し植ゑられし祝賀とて紫宸殿にて行はれき。その後三年にも四年にも行はれき。圓融天皇の天延二年、一條天皇の寛弘三年にまた行はれき。これより後史に闕文多く、今亦搜索の暇乏し。姑く缺如に從ふべし。

當時花の宴といへばその名のみにてもうるはしき事とせられしは源氏物語の卷の名として用ゐられたるにて思ひ知れ。

花の宴の御儀は新儀式、西宮記、北山抄等の諸書に見えたり。それによりて大概を知るべきが、略していはば先づ二月三月の間に催さるることにして、その先一日に召すべき文人を定め仰す。これ漢詩を賦せしめむ爲なり。當日は親王公卿等召によりて參ず。御座は殿中の孫廂にあり、親王公卿の座は簀子に設く。

花の下に疊を敷きて文人の座とす。かくて親王以下詩を獻じ了れば、酒饌を賜ふ。この時より樂所の人管絃を奏す。かくて儒士一人詩を講ず。又時として勅ありて和歌を獻ぜしめらる。されどこれは必ずある事にはあらず。詩は必ずあり。これ嵯峨天皇の例を汲めるによれるなり。親王、公卿、文人等插頭を獻じ、それ〴〵祿を賜ふことありてめでたく終るなり。今それの實際の一例をあげむ。村上天皇の御宇應和三年三月五日に釣殿に於いて花宴を催されたり。日本紀略に曰く、

三月五日戊戌天皇御釣臺（フルドノニ）召文人有櫻花宴花光水上浮。召擬文章生於池中嶋奉試。題流鶯遠和琴勅題也。又有笙歌興文時獻序云々

と。この時に菅原文時の奉りし詩序は本朝文粹に見えたり。その題に曰はく、

暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮應製

と。其の文三百餘言、中に花を敍して曰はく、

觀其花綻在岸、水清盈科（シナ）、花垂映而水下照、水浮光而花上鮮。瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉、染枝染浪表裏一入再入之紅。誰謂水無心、濃艶臨兮波變色。誰謂花不語、輕漾激兮影動脣。嗟呼花之遇時水之得池者歟。

と。この語まことに花の如く濃艶なれば、いたく世に賞美せられて、和漢朗詠集にも入りて永く人口に膾炙せり。

花の宴は上の如く必ず詩を賦せしめられしものなるが、ここに異例の存するあり。そは崇德天皇の御代に催されしは和歌を課して詩を召さざりき。これ一に時世の既に變ぜしが爲なるべし。

奈良の都の八重櫻

平安の宮城の櫻は略上の如し。奈良の舊都の櫻はいかに。平城天皇の御製あり。

古さととなりにし奈良の都にも
色はかはらず花は咲きけり

と。げにも南都の櫻は新京の櫻に劣らざりしならむ。殊に注意すべきは、かの

八重櫻の奈良の名物にてありしことなり。詞花集に曰はく、

一條院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるを、其の折御前に侍りければ、その花を題にて歌よめとおほせごとありければ、　伊勢大輔

古の奈良の都の八重櫻
　けふ九重ににほひぬるかな

と。これ當時萬人感動、宮中鼓動せりと袋草子に傳へたる名高き歌なるが、これにてもその奈良の名物として八重櫻の存せしことを知るべきなり。

沙石集には當時の事につきて面白き物語を傳へたり。曰はく、

奈良の都の八重櫻ときこゆる當時も東圓堂の前にあり、當初時の后上東門院與福寺の別當に仰せて彼櫻を召しければ、ほりて車に入れてまゐらせけるを大衆の中に見あひて事の仔細を問へばしか〳〵と答へければ、名を得たるさくらを無左右參らせらるる別當返々不當也。且は色もなし。后の仰せなればとてこれほどの名木を爭(イカデ)か進すべき、とどめよとて、やがて貝ふき大衆もよほして打とどめ別當をもはらふべしとののしりてけり。此事

によりていかなる重科におこなはれば、我身張本に出べしとぞ云ける。此事女院聞召して、奈良法師は心なき者と思ひたればわりなき大衆なり。眞に色ふかしとて、さらば此さくらをば、我が櫻と名づけむとて伊賀國に余野と云庄をよせて花がきの庄と名づけて墻をせさせられ、花のさかり七日宿直をして是を守らせける。今に彼の庄寺領たり。

と見えたり。この時名木を保護せむとて命を失ふをも辭せざりし奈良の大衆の意氣愛すべからずや。而して、之に感じて庄園を寄附せられし門院の雅量また欣慕し奉るべし。今の人果して櫻の爲に一命を拋つを辭せずとする勇氣ありや。はた之を保護する爲に領地を捨つる熱誠ありや。櫻花國の古にはかかる美談ぞあるなる。

この櫻は上記の沙石集にいふ如く、與福寺に存したりしものと見ゆ。後鳥羽天皇の建久六年三月東大寺供養の時に與福寺の八重櫻の盛なる由新古今集に見ゆるを以てその由來古きを見るべく、この種は今現に奈良春日神社境內、知足院の內又奈良師範學校の庭などに存す。

吉野山

吉野山は萬葉集に屢よまれたれど、櫻の名所たりしことは見る所なし。然るに、かの村上天皇の御宇に植ゑられし南殿の櫻の木は吉野山の櫻木なりし由既にあげたる所なり。之を以て思へば、當時既に櫻の木多かりしこと明かなり。これよりして溯りて何時頃まで達しうべきか。古今集の序に曰はく、

秋の夕、龍田川に流るる紅葉をば帝の御目には錦と見たまひ、春のあした吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなむ覺えける。

と。人丸の歌に吉野の櫻をよめるはあらねば、こは大まかにいひたるに止まれり。されど、延喜の頃吉野山既に櫻の名所たりしを知る徴とはすべし。吉野山の櫻をよめる歌、古今集にあるものを見るに寛平の歌合に紀友則のよめるあり、これらを以て見るに、吉野山の櫻の名所としてもてはやされしは平安朝のはじめに既に起りけむ。然るにこの木本邦自生のものなれば、もとよりその山にあ

りしならむに、かの奈良朝にさばかり吉野離宮の歌多きに一首も櫻をうたへるなきは不審なりといふ人もあらむ。こは故あることなり。吉野と一口にこそいへ、その一郡の廣さは大和國の半を占めてあるなり。かくて吉野の地にても櫻の名所は今吉野山と稱ふる所のみなり。然るに、奈良朝の頃の歌なる吉野は吉野川の上流なる俗に川上郷といふ瀧津瀬多き地なり。奈良朝の頃には今の吉野山は都人の遙に眺めて通り過ぎしはあれど、ここに登るものは蓋し稀なりしならむ。往時かの吉野の櫻は藏王權現の神木と稱して漫に伐るを禁ぜし由に聞くを以て考ふれば、こは修驗道の發展と共にこの山に出入するもの多くなり、從ひてはじめさまでにあらざりし山櫻も藏王權現の繁榮と共に益繁殖するに至りしものならむ。その花のさま拾遺集によめる。

吉野山消えせぬ雪とみえつるは
　嶺つづきさく櫻なりけり

南殿の櫻は既に述べたる所なるが、その天德の炎上の後の內裏御造營の時より、吉野山の櫻を以てせられたることまたここに改めて讀者の注意を喚び起し

おくべきことなりとす。

櫻會

南殿の櫻、清涼殿の櫻を植ゑしめられし仁明天皇こそは父帝嵯峨天皇にもまして櫻を愛し給ひし君にこそおはしけれ。時しも右大臣藤原良房の家の櫻樹の甚だ美しき由を聞し召し、明年の春はその第に行幸して見むと仰せありしが俄かにして崩御ありき。ここに良房之を悲み、その翌年の春三月に櫻の滿開の下に法會を營み奉りき。この事を文德實錄に記して曰はく、

壬午(十日)右大臣藤原良房於東都第延屈知行名僧奉爲先皇講法華經。往年先皇有開大臣家園櫻樹甚美、戲許大臣以明年之春有翫其花。俄而仙駕化去、不遂遊賞。屬春來花發。大臣恨曰、先皇所期之春、今日是也。春來依期、仙去不歸。花是人非、不可堪悲。道俗會者莫不爲之不流涕。公卿大夫或賦詩述懷、或和歌歎逝。

と。これ東大寺櫻會の例を追へるものにして、その志と行とまことに美なりといふべし。艷美なるうちに哀愁の情に滿てること凄艷の語を以て評すべきか。

東大寺の櫻會は正しくは法花會といひて、起源はまさしく奈良朝にあり。天平勝寶十八年別當良辨公家に奏して諸寺の名僧を請し法華經を講じたるにはじまれり。その期を三月十六日とするを例とし、不空羂索院を莊嚴して之を道場とし、樂舞を行ひて上は三寶を供養して東大寺の本願たる聖武孝謙の二帝光明皇后の冥福を祈り、且は當代の聖帝國母太子の玉體恙なく、國土の安穩を願ひ下は當寺に關係ある僧俗上下の幸福を祈るといへり。その承和十三年の緣起は題して、

東大寺櫻會緣起亦名法花會云云

と即ちこの仁明天皇の頃に櫻會の名を用ゐしは一の奇ともいふべし。豈に天皇の德化の致す所にあらずや。その緣起とは蓋し表白なり。その中にいへらく、

法會爲事櫻花散葉遺氣猶香□木開萼感色枝艷云云

又曰はく、

所レ張大鼓美麗如二自鳴天鼓一、左右分行振二大音聲一。

と。その嘉承元年の緣起に曰はく、

然傳二開本願上綱御意一者、紅櫻開數之春講レ妙法蓮花一而期二種智之果一云云

と櫻花の節を擇べる故を語れるなり。この櫻會は鳥羽天皇の頃までは存したること確かなるが、その後は如何になりしかその證を知らず。

さて櫻會は仁和寺にも行はれたり。日本紀略天德元年三月の條に曰く、

十五日壬寅、仁和寺櫻花會左大臣(藤原實資)以下參會

と。詳細は知らねど、當時左大臣は在官者の首位なり。これ亦頗る重き儀にして恐らくはかねて宇多天皇の法要を營みしにあらざるか。同四年三月九日にも「仁和寺櫻會」の事見ゆ。

この次にあらはれたるは賀茂社の櫻會なり。これその神主賀茂成助といふ人のはじめしものにしてその緣起朝野群載に載せたり。これは大江佐國の撰なるがその內に曰はく、

是以前神主賀茂縣主成助、相二迎三春之令節一、開二演八軸之法花一。隨喜之輩號二之櫻會一。在二其期一無二定期一、在二二月三月之芳辰一、其日無二定日一、待二紅櫻朱櫻之盛綻一。薰修黎レ及二于數十年一、彼身□□矣。

と。その始めほぼ推定しうべし。かくて永保三年に當時の神主成經の其の由來を後世に知らしめむとてかく記しおかしめしなり。而して、當時存續したりしこと勿論なり。

櫻會の最花々しかりしは醍醐寺の清瀧會なり。こは密宗血脈抄に、

元永元年三月十六日清瀧會被二始行一是櫻會根元也。

とあり。清瀧とは、瀧の名にして之に基づき祀れる醍醐の鎭守清瀧權現をいへるなり。この社上の醍醐を本とし下の醍醐にもあり。この邊櫻多かりしことは金葉集異本に、

醍醐にまかりたりけるに、清瀧に花のちりたりけるが峰には雪のやうにつもりて水にはつもらざりけるをみてよめる。　贍西上人

ちる花の流るる水につもらぬも

それさへ雪の心ちこそすれ

と。之を櫻會と稱することは醍醐寺雜事記の治承二年八月の文書に「引沙事元三幷櫻會時云云」と記せるにて知るべく、同時にそが元日と對等に取扱はるる點あるを見て盛儀なりしを想像するを得べし。この法會は法會といはむよりも祭禮にして音樂會といはむばかりの狀にして上皇法皇など屢御幸ありて饗宴また盛大なりしが、そは寧ろ鎌倉時代に入りての事なり。この櫻會に舞樂の催もありき。十訓抄に曰はく、

醍醐の櫻會に童舞おもしろき年有けり云云

と。その舞樂のさまはかの天狗雙紙といふ繪卷のうちに醍醐櫻會と題する一圖ありてそのさまを想見せしむるなり。

かくてこの櫻會は後の豐臣秀吉の醍醐の花見の先驅をなすものといふべし。

大江佐國

上にあげたる賀茂社櫻會の緣起を撰したる大江佐國は櫻の歷史には逸すべからぬ一大人物なり。この人は大江朝綱の曾孫にして家學を傳へて詩文を能くす。長久四年九月九日に文章生として惟宗孝言、源時綱、學生藤原國綱と共に召されて弓場殿に於いて勅題を賜はりて試を受けたることあり。後朱雀、後冷泉、後三條、白河の四朝に歷仕して從五位上掃部頭に至り、越前介を兼ぬ。その作る所の詩文は本朝續文粹に載せたり。かの緣起の撰を依賴せられしはその文才によること勿論なるべけれど、この人は古今無雙の櫻の溺愛者なりしことはまことにその事にふさはしき事といふべし。世に傳ふ。佐國常に曰はく死にたる後は願はくは蝶となりて常に花に戲れむと。かくて彼の死後その家の櫻には常に一羽の蝶の戲れ居しを世の人これこそ化身よといひあへりきと傳ふ。これ實に世に稀なる奇談といふべし。次にその物語をあげむ。

佐國花をあいして蝶となる事（發心集一）

或人圓宗寺の八かうといふ事にまいりたりけるに、時まつほどやゝ久しかりければそのあたりちかき人の家をかりてしばらくたち入りけるが、かく

てその家をみればつくれる家のいとひろくもあらぬ庭に前栽をえもいはず木どもうゑて上にかりやのかまへをしつゝいささか水をかけたりけり。いろ〳〵の花かずをつくしてにしきをうちおほへるがごとく見えたり。ことにさま〴〵なる蝶いくらともなくあそびあへり。ことざまのありがたくたぼえてわざとあるじをよび出て此事をとふ。あるじのいふやう、これはなをざりの事にもあらず、れもふ心ありてうへ侍り。をのれは佐國と申て人にしられたる博士の子にて侍り。かのちゝ世に侍りし時、ふかく花をけうしてをりにつけてこれをもてあそび侍りき。かつはその心ざしをば詩にもつくれり。六十餘國見れどもいまだあかず。他生にもさだめて花を愛する人たらんなど作りおきて侍りつればおのづから生死の會執にもやまかりなりけんとうたがはしく侍りしほどに、あるものゝ夢に蝶になりて侍ると見たるよしをかたり侍ればつみふかくたぼえてしからばもしこれらにもやまよひ侍るらんとて心のおよぶ程うへて侍る也。それにとりてたゞ花ばかりはなをあかず侍ればあまづらみづなどを朝ごとにそゝぎ侍るとぞかたりける。

なほこの人の作れる櫻花の詩ありて本朝無題詩に載す。そは下の櫻のしなじなの條にあげたり。

墨染の櫻

宇多天皇の御宇寛平三年正月に太政大臣藤原基經薨ぜり。之を山城國宇治郡深草の里に葬れり。この際に上野岑雄といふものありき。蓋し、太政大臣家の家司なるべし。かの基經の葬られし年の春悲しみに堪へずしてよめる歌、

深草の野邊の櫻し心あらば
今年ばかりは墨染にさけ

といへり。古今集に載せたり。然るに寶物集には之を、

深草の野邊の櫻し心あらば
この春ばかり墨染にさけ

草木心なしといへども物のあはれをしればこそ其春にはすみ染に咲けるといへり。今にふか草のすみそめ櫻とてあり。

といへり。この墨染の櫻といふものの傳說にしたがへば、まさしく今年より一千三十年の古より傳はれるものなり。今もこの墨染の櫻と傳ふるもの稀に世に存す。わが鄉里富山市稻荷町にも亦一の老樹あり。これも深草の里より後醍醐天皇の御宇頃に傳へしものといへり。

この墨染の櫻の事は榮花物語に圓融天皇の諒闇の比寬方の中將の櫻の枝を人にやるとて、

墨染のころもうき世の花ざかり
　をりわすれてもをりてけるかな

といふ歌をよめる、その櫻すなはち墨染櫻なりきといふものもあり。梅花無盡藏に「遊深草看墨染櫻」といひて詩あり。櫻品亦その品を載す。そのはじめは上野岑雄の歌に基づきて名づけたること著し。

花見

さても平安の朝は櫻の盛時とはなりにけり。遠くは吉野に山櫻あり、奈良には八重櫻あり。都大路には行路樹として柳と櫻を交へうゑられたり。

見渡せば柳櫻をこきまぜて
　都ぞ春の錦なりける

これぞかの素性法師が京を花ざかりに眺めやりてよめる歌なる。この頃の都の春の眺め思ひやるべし。

櫻を愛する情はおのづからその花の下に行きて見ることを生ず。これ卽ち花見なり。さては櫻のありし所々は如何。宮中の櫻は旣に述べつ。離宮にては朱雀院、高陽院、公卿大夫の家々また櫻をうゑたる多し。そが中にも最も名高かりしは先に述べたる染殿の櫻なり。染殿の櫻花の法會は旣に述べつ。かの法會ありて後二年を經て仁壽三年二月には文德天皇かの第に臨幸ありて之を

御覽ぜられき。これ且は良房の請により、且は先皇の御遺志を遂げさせ給ふ爲なりしなるべきが、もとよりその花の美しく名高かりしに因らざるべからず。

清和天皇の御宇貞觀六年に亦良房の染殿に行幸ありて櫻を賞せられき。蓋し、この年天皇御元服ありしによりてはじめてこの事あるなり。時に良房太政大臣たりき。その狀を三代實錄に委しく記せり。夜に入りて還幸ありき。貞觀八年三月に右大臣藤原良相の西京の第に行幸ありて同じく櫻花を賞せられ次いで閏三月朔には亦かの染殿第に行幸ありて花を賞せられき。その時の歡樂の狀また前の如く日暮れて還幸ありきといふ。これより後にては粟田左大臣在衙の山莊中納言義懷の家など名ある所なり。

郊外にては花山あり。雲林院あり。後に至りては藤原の俊綱の伏見の家最も名高かりき。當時東山のあたり殊に白川一帶に櫻多かりしが如し。日本紀略天曆三年二月廿八日の條に、

上皇御二東山一覽二山花一更御二九條殿一。

と。朱雀上皇の御遊覽をさせるなり。かの粟田左大臣の山莊もここにありき。

花見といふ語は古今集に既に多く見えたり。たとへば、

雲林院の皇子のもとに花見に北山のほとりにまかれりけるに　素性

いざ今日は春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

とある如きこれなり。その花見に酒食など携へて老若の樂しみし事は後撰集に、

花山にて道俗酒たうべける折に　素性法師

山守はいはゞいはなむ高砂の尾上の櫻をりてかざさむ

とみゆ。これ宛ら今の花見の心なるは古今一轍なるを證すといふべし。東山の花見の事は新古今集に、

東山に花見に罷りて侍るとて此彼誘ひけるをさしあふ事ありて留りて申し遣しける　安法法師

身はとめつ心はおくる山櫻風のたよりに思ひおこせよ

とある例にて知らる。

白川の花見屢行はれたるうちに殊にすぐれておぼゆるは崇德天皇の御宇保

安五年閏二月の白河法皇鳥羽上皇の兩院の法勝寺の花の宴にぞある。百錬抄に曰はく、

十二日、兩院臨二幸法勝寺一覽二春花一。太政大臣雅實攝政忠通以下騎馬前駈。內裏中宮、女房連車追從。男女裝束裁二錦繡一。於二白河南殿一被レ講二和歌一。內大臣獻レ序。

とあり。この事は今鏡に白河の花の宴と題して委しく記せり。その花のさま、み寺の花、雪のあしたなどのやうに咲きつらなりたる上にわざとかねてほかのをもちらして庭にしかれたりけるにや牛の蹄もかくれ、車のあとも入るほどに花つもりたるにこずゑの花も雪のさかりにふるやうにぞ侍りける。

と見ゆ。花の美と人の艷と映えあへりしさま想ひ見るべし。

臣下の花見の著しきは堀河天皇の康和元年三月に、前關白藤原師實、關白藤原師通等が東北院、革堂、雲林院、齋院御所等の櫻を巡覽賞翫せしことなり。この事は後二條師通記に見ゆるが、それは十四日に己が邸の池邊の櫻花の盛りなるを見て、思ひ起し、十七日に上述の所々を歷覽せしなり。その記事を見るに「先向二東北院一落花如レ雪」といひ、次に革堂の花を見、次に

又向二雲林院一東山眺望觀音院櫻花似レ雪、參二齋院一白花神妙也

とありて、花下に就鞠の興を催すに、

此間花散如レ雪下、萬人驚レ目

と見ゆ。この時に女房のよめる歌

はなざくらちりしくにはをはらはねばきえせぬゆきとなりにけるかな。

中宮大夫師忠の返歌

しめのうちにちりしくにはの花なればちとせのはるもなにかかはらむ。

櫻狩

櫻狩といふも亦花見なり。されど、おのづから別の趣あるはもと鷹狩に出でしついでに花を賞せしが、いつしか狩のことは忘られて花見のことのみとなり

ける様と思はる。かくてこは當初の鷹狩の事はなくなりたれど、遠く野山を狩り暮して一二泊も旅寢すること多かりしやうなり。その事の歌に見ゆるは拾遺集によみ人不知の歌として、

櫻狩雨は降りきぬ同じくは
　ぬるとも花のかげに隱れむ

又新古今集に載せたる俊成卿の歌、

　またや見むかた野のみのの櫻狩
　花の雪ちる春の曙

などなり。かくてこの交野こそは古より櫻狩の名所として名高かりしところなれ。

交野は河内國交野郡にありし禁野にして延暦六年十月に桓武天皇の鷹狩せさせ給ひしことを初見とし、其の後屢行幸ありて放鷹せられし所なり。ここにての櫻狩のはじめともいふべきは惟喬親王の御催にやあるべき。この事伊勢物語に委しく記したり。且は興ある物語なれば少しく次に引き出づ。

花の折枝

昔惟喬のみこと申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人（在原業平）を常にゐておはしましけり。狩はねんごろにもせで酒を飲みつつやまと歌にかかれり。今狩する交野の渚の家その院の櫻ことにおもしろし。その木のもとにおり居て、枝を折りて插頭（かざし）にさしてかみなかしもみな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また人の歌、

ちればこそいとど櫻はめでたけれうき世に何か久しかるべき

とて、この木の下（もと）は立ちてかへるに日暮になりぬ。

と。これより後交野の春の櫻狩といふこと汎く人口に膾炙するなり。

花を賞するものは遠く之を眺め、近くその下に立ちてめづるに倦き足らずして、ばては之を手にとり翫ぶに至るはこれ亦人の情なり。素性法師が歌に、

見てのみや人に語らむ櫻花
　手毎に折りて家づとにせむ

と。實情を語れるなり。折りたる枝は如何にせし。插頭にせしは既に前に述べたるところなれば今いはず。ここに面白しと思はるる物語あり。古今著聞集十八巻に曰はく、

寛弘三年三月四日、東三條より一條院に行幸ありけり。先家の賞を行はれて後、御作文管絃など有けり。又盃酌の興もありけり。内大臣御盃を奉らる。中納言俊賢卿御銚子をとる。左府道長天盃を給はりて例の如くかはらけを移し飲みて、南階をおりて拜舞有りけり。池邊の櫻の枝を折りて西階をのぼりて袖を飛して警蹕をかまへて主上に奉りけり。其後人人のかざしも有りけり。

この代には既に花の枝を瓶に生けて室内の飾ともなしなり。かの藤原良房がその女なる皇后を花にたとへて、

年ふれば齡は老いぬしかはあれど
　花をし見れば物思もなし

とよまれしは「染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をささせ給へるを見てよめる」と古今集にいへり。後撰集には紀貫之が「櫻の花の瓶にさせりけるがちりけるを見て」中務といふ女に遣しける歌とて、

久しかれあだに散るなと櫻花
　かめにさせれど移ろひにけり

又枕草子に、

清涼殿の（云々）高欄のもとに青きかめの大きなる据ゑて櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば高欄のもとまで咲きたるに云々

などかけるにてその狀を想像しうべし。

櫻のしなじな

南都の八重櫻のめでられしは、そが世の常のものにあらざりしが故なることいふまでもなくこれによりてこの時代に多少の品種の存せしことを想像しうるなり。

枕草子「木の花は」の條に、

梅のこくも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに葉色こきが枝ほそくして咲きたる。藤の花しなひ長く色よく咲きたるいとめでたし。

とあるにてその事亦證すべし。然らばそれらの品種として如何なる名目ありしか。この事もとより文獻乏しければ確かにはいひ難きことなれど、それと思はるべきもの二三を次にあぐべし。

本朝文粹に藤原篤茂の「仲春於左武衛將軍亭同賦雨來花自濕」の文に曰はく、

爰左武衛將軍有一樹紅櫻也。色異常花艷勝他樹是城中之第一者耶。

と。これ樹の特にめでたかりしをいへるか、或は特別の種類なりしか。この書の編者は藤原明衡なるが、本朝無題詩には特に「紅櫻花下作」と題せる詩三首を載せたるうちの一首は明衡の作にして他は惟宗孝言、大江佐國の作なり。その佐國の詩、

聞說紅樹艷彩奢、翫來空及暮天斜、僉論庭上兩三樹、已是洛陽第一花、
色映秋風林頂露、粧移朝日嶺頭霞、榮花路隔枯株質、相對等閑有與加。

この「洛陽第一花」といへるは、恐らくは上の篤茂のさせる樹と同一なるべきか。而してその色をば秋の紅葉と朝の曙光とに比するを以て尋常の山櫻の類にあらざるを見るべし。ここに至りてはこの紅櫻は確に一の品種たりしことを想像すべし。

大江佐國の櫻花に執着せしは既に說きしところ、この人まさに櫻につきては當時の博識たりしなるべし。この人既に紅櫻の一種特別のものなることを示せり。然らば彼櫻會緣記に「待紅櫻朱櫻之盛綻」といへる朱櫻と紅櫻とは二

種を竝べあげたるものと考へざるべからず。然する時はこの紅櫻は卽ち今の牡丹櫻の如き色の花にして朱櫻は緋櫻の如きものなりと考へらるるなり。按ずるに近江御息所歌合の題に「花櫻」「かにはさくら」「火櫻」「庭櫻」などあり。「にはざくら」は漢名扶移、「かにはざくら」は樺にして今の櫻の種類にあらねど花櫻と火櫻とは櫻の二の品種なるべきことは、他の植物には、

梅、柳、棟、岩つつじ、楓、岩柳、うきくさ、梨の花、桃の花、梶の木花、山ちさのはな、さるとりの花、山なしの花、つつじの花、山ふきの花、ふぢのはな

と記せるに對して明なり。之を以て考ふればかの朱櫻はこの「ひざくら」にあたるべきか。而して花櫻といふも特種のものたりしが如く思はるれど、そは今の何にあたれるかは知るべからず。

續詞花集に、

雲林院のうずざくらみにまかりけるにみなくちはててかた枝の殘れるにいとをかしくさけりけるをよみはべりける　良暹法師

たづねつる花もわが身もおとろへて後の春ともえこそ契らね

とあり。これによれば俗にいふ鞍馬の雲珠櫻は頗る古くより存したるを見るべし。然もこの鞍馬といふは鞍に雲珠といふ飾あるよりふといひ出でし語にして本來鞍馬山とは關係なきものなり。

永曆元年七月に藤原清輔の家に催せる歌合の時櫻の題にて顯昭がよめる歌、

わぎもこがはこねの山の絲櫻
　結びおきたる花かとぞ見る

これによれば絲櫻といふものこの時既にありしなり。この櫻白川なる法勝寺にありしこと古今著聞集風雅集に見えたり。この絲櫻といふは「しだり櫻」と同じかるべきか。「しだり櫻」といへるものも亦當時ありき。散木集に見えたる源俊頼の歌に、

あすもこんしだり櫻の枝ほそみ
　柳の絲にむすぼほれけり

以上は匆卒に見出でたるものなり。なほ識者の教を待つ。

花合

櫻を賞美すること人々の間に多く行はれ、又所々にさまざまの櫻のあること知らるゝ世となりてはそれらの花をくらべ見むの望み起らむことは自然の勢なり。ここに花合といふこと生じぬ。

この花合は歌合又は繪合などに學びてはじめられしものならむか。永承五年正子内親王繪合に曰はく、

はるの日のつれ〴〵にくらすよりはつねならぬいどみごとをおまへにごらむぜさせばや。むかしよりきこゆる花あはせなどはちりてふるきねにかへりぬればにほひことにしく草あはせとかはたづねてもとのところにかへしやればなごりうるさし

と見ゆるを見れば、その行はれしはこれより古き時代にありしものの如し。されど、われらが知れるものにては堀河天皇の承徳二年三月三日に中宮にて行はれしものを古しとす。その事は長秋記目錄に、

三月二日依召參內。明日中宮御方花合云云。望夜聞延引由

とあり。これによれば、三日に行はるべきが延引せし由に夜分に聞きたりし由なれど、三日の條に、

三日御燈御拜後、中宮御方被獻落花

とあれば、なほそれが催されしことを見る。又新千載集春下には、

長治二年閏二月中宮花合によみ侍ける　　權中納言國信

手折とて宿にぞかざすさくらばな枝は風のうしろめたさに

と見ゆるが、これも堀河天皇の御世のことなり。十訓抄上を見るに

堀川院御時中宮の御方にて花合と云有けるに越前守仲實が歌に云云

といふこと見え、散木奇歌集卷一にも同じさまの事見ゆ。それは承徳の度の花合か、長治の度のかは明かならねど、散木奇歌集の文はその花合といふ催しのさま少く知らるるやうなれば次に掲げむ。曰はく、

堀川院御時きさいの宮の御方にて、かたをわかちて、花ををりにつかはし

て、御前のいづみにたてならべて歌よませ給けるによめる、

吹風をいとひてのみもすぐすかな花みぬ年の春しなければ

又人にかはりて

九重にうつさざりせば山ざくらひとりやこけのうへにちらまし

と。これによれば、その花は枝を折り來りて、泉にさして、賞翫し優劣を定め、さて例の如く和歌をよみて奉りしものと見えたり。

この花合は鎌倉時代に入りても行はれたり。古今著聞集十九に曰はく、

順徳院御時内裏にて花あはせ有けり。人々めん〳〵に風流をほどこして花奉りけるに非藏人孝時大なる櫻の枝を兩三人してかかせて、南殿の池のはたにほり立たりけり。筒を付て大花とかきたりけり。云云

と。これにも亦池のはたに花を立てならべたるを見る。而してそれらはそれぞれその花の名をかきたる札をつけたりと見えたり。又藤原光經集に、

内裏女房花合にまけて花にさしていだすべき歌こひ侍しかば

吹風も治れる世は香もせでのどかに匂ふ花ざくらかな

とあるを見れば後堀河天皇の御宇の頃女房の内々の花合もありきと見えたり。

櫻人

中古の聲樂なる催馬樂の呂の歌に櫻人と名づくる曲あり。その詞章は櫻とは何の關係もなきものなれど、古來觀櫻の宴の樂には奏せらるるを例とせり。たとへば、古今著聞集巻六に堀河天皇の嘉承二年三月五日鳥羽殿に行幸ありて六日に和歌の興を催されたる際に櫻人を奏したることあり。又增鏡の村時雨の巻に後醍醐天皇が元徳二年三月北山に花御覽の行幸ありし際に、天皇御親ら櫻人をうたはせ給へる事あり。かく櫻を賞する宴に櫻人をうたふことは大宮右大臣藤原俊家にはじまるものの如し。古今著聞集巻六に曰はく、

いづれの比の事にか。大宮右大臣、殿上人の時、南殿の櫻さかりなる比、うへぶしよりいまだ裝束もあらためずして、御階のもとにて、獨花をながめられけり。霞わたれる大内山の春のあけぼののよにしらず、心すみければ高欄

によりかかりて扇拍子に打て櫻人の曲を數反うたはれける、多政方が陣直つとめて候けるが、歌の聲を聞て花の本にすすみて出て、地久の破をつかうまつりたりけり。花田狩衣袴をぞきたりける。舞はてて入ける時櫻人をあらためて、蓑山をうたはれければ、政方又立歸て同急を舞けるをはりに花の下枝を折て後ふるまひたりけり。いみじくやさしかりける事也。この事いづれの日記にみえたるとはしらねども古人申傳へて侍り。

といへり。俊家の殿上人たりしは後一條天皇の長元年中のことならむ。當時俊家年まさに十八九歳なるべく、その若々しさと櫻花のうるはしさとその歌と舞とのはなばなしさと如何に興深きものなりけむ。かくして詞章にては關係なき櫻人の曲とこの花と深き緣を結ぶはじめとはなりけむかし。

われ今ここに櫻人の名に因みて、この頃櫻をめで櫻に因みて名高き人々の事を少しく述べむと思ふ。

櫻をめでつる人として最も名高く、又最も心深きはさきに述べたる大江佐國を第一とすべし。これにつぎては櫻町の中納言藤原成範とす。その事は平家物語に見ゆ。曰はく、

抑この成範卿を櫻町の中納言と申ける事はすぐれて心數奇給へる人にて、つねは吉野山をこひ、町に櫻をうゑならべ、其内に屋を立てすみたまひしかば、來る年の春毎にみる人櫻町とぞ申ける。櫻はさいて七箇日にちるを、名殘を惜み、天照御神（あまてるおほんかみ）に祈り申されければ、三七日迄名殘ありけり。君も賢王にてましませば、神も神德をあらはし、花も心ありければ、二十日の齡をたもちけり。

と見ゆ。この櫻町はその邸もと紀貫之の住所にして古より櫻のありし所なるが、これより後一層名高くなれるなり。さるにても神に祈りて花の壽を延べたる人は古今に例なきなり。さてかく祈れる神は天照大神にあらで、支那の神泰山府君なりともいへり。延慶本平家物語に曰はく、

來れる年の春毎に花を詠じて、さく事の遲く散る事の程なきを歎て、花の祈りの爲にとて月に三度必ず泰山府君を祭りけり。さてこそ七日にちるならひなれども此櫻は三七日まで梢に殘りありけれ。

と。八重櫻の遲く咲く花の名に泰山府君といふがあるは、この古事を下心にて後の人の名づけしなり。

西行法師も亦櫻の謳歌者なり。その愛好するは自然その物にありしが、そのうちにも最も愛せしは櫻と月となりき。その櫻に讃美する言を聞け。

たぐひなき花をし枝にさかすれば
　櫻にならぶ木ぞなかりける

その吉野山に庵を結びてやがて出でしとうたひし如き、櫻花に愛着するの深きを見るべし。その極は、

ねがはくは花のもとにて春しなん
　その二月の望月のころ

とうたふに至りぬ。かくて終に文治六年四月建久と改元二月十六日に往生を遂げぬ。これ釋尊涅槃の日に入定せむと願へるなれど花の下といへる執着はかれが櫻に對する本心を吐露せるもの。余はここにかの成範と比して面白き對照を感ず。彼は櫻花の生命を長くして己と共に一日も多く存せむを冀ひ、これは自ら花に生命を同化せんとせり。一は現在的にして積極的なり。一は出世間的にして消極的なり。而して又後世西行櫻といへる品種を生ぜるはかの泰山府君と比してげにも面白き事柄といふべし。

櫻によりてその人の美を發揮せる人は古今頗る多し。そが中にも八幡太郎義家こそはすぐれて覺ゆれ。千載集に曰はく、

みちの國にまかりける時、なこその關にて花のちりければよめる
　源義家朝臣

吹く風を勿來の關と思へども
　道もせにちる山櫻かな

と。その他源三位頼政が宮中御會に

深山木の其の梢とも見えざりし
　櫻は花にあらはれにけり

と詠じて叡感に預り、薩摩守忠度が生死の巻に立ちながら、千載集撰者にその家集を託して、

さゝ浪や志賀の都は荒れにしを
　昔ながらの山櫻かな

の名歌を永く世に傳へ得たるなど、いづれも武人の雅懐として人口に膾炙する所吾人をしてその人の如何に優美なりしかを想像せしむ。しかも、これらの人いづれも一門の中にもすぐれて武勇に長ぜし人々にてありしのみならず、いづれも櫻花の名歌を詠じ、それによりて名を後世には流せるなり。「花は櫻木人は武士」誰人かいひ出でし。眞に知言なるかな。

近古の巻

左近の櫻

櫻史は中古を經て近古に入りぬ。ここに近古といふは所謂鎌倉幕府執政の時代をさすむと欲す。

われ今この記述の第一として更に南殿の櫻を說かむと欲す。この櫻のことは前期堀河院御宇に改め植ゑられしことをいへり。さてもこの樹は、かの承久元年に時の大內守護たりし右馬權頭源賴茂追討の際、賴茂火を殿舍に放ちて自殺したりしが、この際に燒亡したりしなり。かくて同二年より造營の擧ありしかば源光行の家にその種を存してありしを召して植ゑられきとなり。古今著聞集卷十九にいはく、

南殿の櫻は(云云)承久に右馬權頭賴茂朝臣うたれし時又やけにけり。やがて造内裏ありしにこの櫻のたね大監物源光行が家にうつしうゑたるよしきこえてめしてうゑられけるとぞ。いづれの時のたねにてかありけむ。おぼつかなし。その櫻もいく程なくてやけぬれば今はあとだにもなし。くちをしき事なり。

と。されば著聞集の撰せられし建長の頃には再び跡だになくなりしなり。

抑も大内裏は承久元年にかの賴茂追討の際炎上し翌二年より造營を行はれしが、その翌三年承久の大亂ありて工事中絶し、亂平ぎてよりまた造營を續けられたりしかど、後堀河天皇の安貞元年四月に火災ありて造營中なりし宮殿烏有に歸しぬ。これより後また大内裏の造營なし。されば源光行の家より移し植ゑられし櫻樹はまさしくこの安貞の火災に失せしなり。

大内裏燒亡の後は皇居は假皇居卽ち里内裏を以て之に充てられたり。その里内裏は土御門殿、閑院殿、大炊殿、富小路殿等なりしが後に至りて東洞院土御門殿事ら正しき皇居の姿となれり。卽ちこれ今の京都皇居の前身なり。さてかかる里内裏にても、大内裏に擬して紫宸清涼等諸殿の設けあり。從ひて又南殿に櫻を植ゑられたるなり。今その一二の證をあげむ。寬喜の頃の皇后は閑院なりしが、これにも櫻を植ゑられたり。百錬抄に曰はく、

寬喜元年二月二十七日仁和寺宮櫻樹一株被二移植一閑院南殿前一。左中將資季朝臣仰二本府一被二沙汰一云云

と。この櫻は八重なりしか一重なりしか知る所なし。この内裏は正元元年に炎上して後造營なし。

續千載集卷二に曰はく、

南殿の櫻を本府より植ゑ侍りける時大内の花のたねにて侍りければ

左近大將爲教

いにしへの雲井の櫻たねしあればまたはるにあふ御代ぞしらるる

と。こは何時の事なりけむ。爲教といふ人に左近大將たりし人史上に見えず。恐くは定家の孫爲教をさすか。然れどもこの人右兵衞督たりしことはあれど、大將たりしことなし。されば疑しけれど、今この爲教とせむか。これまさに文

永の頃の事なるべし。而してその南殿とさせるはいづれの里内裏なりしか知るに由なしといへども、恐らくは東洞院土御門殿の南殿にてありしなるべし。かく考ふる故は、この里内裏にも南殿の櫻ありてそれが、吉野の櫻と同じく一重なりしことはかの徒然草に、

吉野の花左近の櫻みな一重にこそあれ

といへりしにて知るべし。これ即ち古へ吉野山の櫻の種をうゑられし故實を存するものと知られたり。

新千載集巻二に曰はく、

南殿の花御覽ぜさせ給うける折しもきさいの宮の御方より殿上にさぶらふをのこどもの中に宮づかさなるして一枝折らせられけるを御前にめして仰事ありける　後醍醐院御製

九重のくもゐの春のさくら花秋の宮人いかで折るらむ　後京極院

御返し

手折らずは秋の宮人いかでかは雲居の春の花を見るべき

と。この折の櫻はまさに一重の山櫻なりしを思ふべきなり。

さてもこの左近陣の櫻は、古來山櫻を植ゑられたるものにして、寛政以降の櫻譜の類には多く赤芽の種類を描けるが、現時拝觀するところのものは茶芽の白花大輪の山櫻にして滿樹花を以て飾られ、盛觀比なきものなりといふ。

庭の白雪

庭園に櫻を植ゑてその花を賞せしことは奈良時代の頃より盛に行はれたりしことは今再び贅言するを要せず。この時期に至りても亦愈盛に行はれしが如し。俗に後京極攝政良經公の作と傳ふる作庭記は平安末期の作なるべくして、わが造園史上最古の文獻なり。それがうちに、

樹は青龍、白虎、朱雀、玄武のほかはいづれの方に植ゑむとも心にまかすべし。

但古人云東には花の木を植西にはもみぢの木をうゝべし。

と。この花の木とは蓋し櫻樹をさせるなり。かく庭に櫻を植うることは當時の風流として盛に行はれしが如し。今一二の例をあげむ。明月記に曰はく、

元久二年九月廿三日早旦行二東山一堀二櫻木一栽二京極殿一。

同月廿九日今日又櫻一本獻二京極殿一。

元仁二年二月八日午時中將來、昨日參二北山一近日毎レ人被レ宛二櫻木一被レ栽二前庭一云云

承元元年三月九日私向二嵯峨一爲レ見二庭樹花一也自レ栽レ樹漸長見二其花一養レ志夕歸レ。

嘉祿三年二月廿一日櫻小木三本栽之。

同月廿二日酉時自二嵯峨一使者歸、持二來櫻木一本一栽二南庭一。

と。これらにて櫻樹を庭に植うることの盛に行はれし一斑を察するを得べし。

櫻を庭に植うることは蹴鞠の流行につれて一層甚しくなれるが如し。今その大略をとかむ。

蹴鞠の庭に植うる木を懸りといふ。懸りの木は松、柳、楓及び櫻を主とせるが、そが中にも最も櫻を重しとせり。遊庭秘抄に、

懸事

本儀は柳櫻松鶏冠木此四本也。其外梅も常に用レ之。此木は簷近く何れの角にても栽也(云々)柳は巽、櫻は艮、楓は坤也。此隅々にかの木どもを植る事本式也。

とあり。又蹴鞠簡要抄に曰はく、

一　懸事

師說云かかりは櫻の木をむねとする事也。柳松楓こればかりなり。

一　櫻木事

景忠云かかりは櫻をむねとする事也。花盛ちりかかるをいみじき事にする也。

と。蹴鞠の庭に櫻を重んじたること以て見るべし。

かくて又鞠を木の枝につくることあり。この時も亦櫻若くは柳につくるなり。上の簡要抄に曰はく、

一　付枝事

師說云柳櫻に付る也。紙捻りを鞠のをにかき通して一結びにして後に

えだに付る也(云云)花咲ぬをりは作り花にも付る也

抑も蹴鞠の技は古代より行はれて、その初を知らず。かの皇極天皇の御宇に中大兄皇子中臣鎌足と法興寺の槻樹の下にてこの技をなし賜ひしことは人の熟知するところなり。これよりその技行はれてはあれど久しく聞ゆることなかりしが、かの保元の頃侍從大納言成通卿この技に通じて神に入ると稱せられてこの技勃興せり。後鳥羽天皇亦之を嗜みて熟練の譽あらせたまひ、飛鳥井雅經又之をよくし、後世飛鳥井家及びその庶流たる難波家と共に蹴鞠の道の宗家と稱せらるるに至れり。而して上の如く懸りに一定の木を用ゐることは保元の頃、内裏にて行はれし蹴鞠に始まるといへり。

增鏡老の浪の巻にいはく、

(弘安二年やよひのすゑつかた持明院殿の花ざかりに新院(龜山)わたり給ふ。鞠のかかり御覽ぜんとなりければ、御まへの花は木すゑも庭もさかりなるに、よそのさくらをさへめしてちらしそへられたり。いとふかうつもりたる花のしら雪あとつけがたう見ゆ。上達部殿上人いとおほくまゐりあつまり、御隨身北面の下﨟などいみじうきらめきてさぶらひあへり。(中略)くれかかるほど風すこしうち吹きて花もみだりかはしくちりまがふに御鞠數多くあがる。人々の心ちいとえむなり。ゆゑある木影にたちやすらひ給へる院の御かたちいときよらにめでたし。

と。艶陽三月の天風靜に氣長閑なる頃裝束美々しき大宮人の櫻の下に相會して庭の白雪ふみしだき鞠の遊びせること、これ豈に一幅の好畫圖にあらずや。

櫻花と蹴鞠とはかくも深き因緣を有せり。かくて後世には櫻のみ專ら懸りに用ゐられたり。東野州聞書に曰はく、

寶德二年三月於御所云々同時御會

寄花祝

今よりは猶末とをく契をけ四本の櫻千代にあまりて

其時分御まりのかかりうゑられけるとなん

又飛鳥井雅章の吉野紀行に藏王堂の大庭の四本の櫻に蹴鞠の興を思ひいでて、

鞠の庭に移し植ゑなんみよしのの四本の櫻おもかげにして

とよめるなどにて知らるべし。

花のくさぐさ

當時櫻の名として知られたるは山櫻はいふまでもなく、八重櫻、絲櫻、又遲櫻、早櫻、紅櫻、四季に花咲く櫻などなりき。遲櫻は蓋し八重櫻の他の櫻より花の後にてさくによれる名にして一の品種の名にはあらざらむ。早櫻は明月記に、

元仁二年二月晩梅早櫻昨日開

とあり、おのづから一種の櫻なりしなるべし。紅櫻は同じく明月記に、

寛喜元年三月廿九日九旬之艷景空過八重之紅櫻猶殘

とあるにて八重櫻の色濃きをいへりしを知る。四季に花さく櫻は源平盛衰記に、

四季に花さく櫻を植て駒を遊ばしめ給しより是を志賀花園とは申也

といへり。これは天智天皇の御時の事を說けるなれど、其時にこの苑ありしか

覺束なし。ただ盛衰記の作者かかる櫻の存せるを知りしなりとすれば、この期にこの櫻ありし事とすべし。然らば、これは今いふ不斷櫻にしてその樹間々地方に存すと傳へらるるなり。

絲櫻といへるもの箱根山又白川なる法勝寺にありしこと既にいひたる所なるが、その木のさまの如何にありしかは次の歌にて知らるるなり。

露をおもみ梢たれたる絲櫻
　柳が枝に咲くかとぞ見る

これ寶治の頃前太政大臣藤原兼經の北山の別莊に御幸ありける時花さかりに雨ふりけるを見て主人のよめる歌なり。それにて今日の所謂枝垂櫻なるを想像しうべし。この櫻のなほ法勝寺にありしことは古今著聞集にも見え、又風雅集に、

絲櫻のさかりに法勝寺をすぐとて　　淨妙寺關白右大臣

立ちよらで過ぬと思へど絲櫻心にかかる春の木の本

上の如く種々の櫻ありけれど、庭樹として最も賞せられしは八重櫻なりしが

如し。この櫻のもてはやされしことは當時の歌集又記錄に多く證あり。新古今集に式子內親王が家の八重櫻を折らせて惟明親王の許に遣されしことを載せ、又續後撰集に同じ內親王が同じく八重櫻を後京極攝政につかはされしことも載せたり。又續後拾遺集には前大納言資季が內裏より八重櫻を召されて奉れる時の歌を載せたり。又光明峯寺前攝政左大臣道家が家の八重櫻を內裏へ召されける事新拾遺集に見え、同じ人が定家卿に八重櫻を贈れる由も續拾遺集に見えたり。又かの西園寺公經の北山の別莊には山櫻、絲櫻の外八重櫻も植ゑられたりしことは續千載集に、

西園寺の八重櫻を見てよみ侍ける　常磐井入道前太政大臣

山ふかみ軒端にかゝる白雲の八重にかさなる花櫻かな

とあるにて知られたり。又明月記を見れば定家卿の八重櫻を愛せしことの甚しきを見るべし。曰はく、

嘉祿元年三月十七日近日八重櫻之盛也。

寛喜二年二月廿日今朝爲ㇾ翫二八重櫻一欲ㇾ參二御室一自朝天陰風烈仍止了。

廿一日京中野外櫻花盛開如ㇾ雲如ㇾ雪參二西郊大聖院一遠望宮樹開敷未ㇾ散就中門內兩株階前八重濃艷映ㇾ水芬芳滿ㇾ庭。

寛喜三年正月廿五日堀二弃南庭一西柳柳三本夏陰暗之故棄一本其跡栽二西庭一八重櫻。

三月二日通夜大風雨云々纔開八重櫻作莖吹剪了。

貞永二年二月廿八日左衞門尉行範自二大殿一來堀二八重櫻一。

と。世を擧りて八重櫻を謳歌せし狀以て想ひやるべし。然れども又之を貶けたるすね者もなきにあらざりしなり。卜部兼好が徒然草に曰はく、

八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。うるずともありなん。

と。さすがの八重櫻もこの一言にはいたく面目を失へりとやいはまし。

徒然草に又曰はく、

八重櫻は奈良の都にのみありけるを此ころぞ世におほく成り侍る

と。げにも八重櫻はもと奈良の舊都の名物なりしが、今の京にもうつし植ゑら

れむとせしことは前編に說けることなるが、そのいたく世にひろまれるは實にこの時代にありしなり。さてもその當時奈良にては如何といふに、新古今集に

建久六年東大寺の供養に行幸の時與福寺の八重櫻盛なりけるをみて枝に結びつけ侍りける　讀人しらず

ふるさとと思ひなはてそ花櫻かかるみゆきに逢ふ世なりけり

とみえたればなほ榮えたりしこと知られたり。この種今なほ奈良に或は春日神社の境內等に僅かに存す。彼地に遊ばむ人は往きてその芳魂を弔へ。

接木の櫻

八重櫻は實を結ばぬものなるべければ、之が繁殖は特殊の方法によるべきなり。ここに於いて余は、當時接木の行はれしことを語らむ。古今著聞集第十九に曰はく、

承元四年正月の比內裏大炊殿にて源仲朝已下藏人町へ罷りけるに大炊御門おもての唐門よりなえ〳〵とある衣冠の人參りけり。主殿官人が朝ぎよめに參るにやと見侍ければ、尻さへよごれたるうす青のひとへ狩衣着たる侍を一人具したり。誰やらんと見けるに、冷泉中將定家朝臣なりけり。只今なにしに參るやらんと怪しく見るに、南殿へむかひてわたどのの前なる八重櫻のもとにいたりて立たり。花のころにもあらぬに梢を見上げてやや久しく程へて侍を木に上せて枝一をきらせてたろさる。その枝を袍の袖くくみにとりて出にけり。事の樣何とはしらねど優にたのもしければ、內に其のやうを披露してけり。花を賞でつぎ木にせんとてとらせけるにこそと御沙汰ありて、そのしるしいひやるべしとみことのりありければ、女房伯耆くれなゐのうすやうに書てつかはしける。

なき名ぞと後にとがむな八重櫻うつさんやどはかくれしもせじ

返し

くるとあくと君につかふる九重のやへさく花のかげをしぞ思ふ

とあり。これ卽ち定家卿が大炊殿內裡の八重櫻をとりて接木せむとせしをい

へるなり。かくて彼れの日記を見るに、彼れはこの折に限らず、盛に八重櫻の接木を行ひしなり。

明月記に曰はく、

嘉祿二年正月廿七日天晴昨今剪庭前小樹續八重櫻枝五六本

嘉祿三年閏三月二日去々年春所繼之八重櫻花欲開以之養心神、冬春之間栽木皆以不枯葉各萌。

八日去々年所續八重櫻花初開。

寛喜元年三月九日先年所繼八重櫻花二開始又先年栽下枝同僅開眼前待得之。

寛喜二年三月七日早旦重以宗弘問有長朝臣(中略)兩株八重櫻一條殿枝續木花漸開。永日徒然分栽菊苗草不憚土用

貞永二年三月十一日八重櫻一條殿繼木已開欵冬未落、養閑庭眼。

と。之によりて見れば、その八重櫻の接木を盛に行ひしことを見るべく、而して又かの定家卿一人に限らず、他にも行はれてありしことをも想像しうべし。

抑も七百年前の當時接木の如き技術の行はれしことはわが園藝史上極めて重要の事に屬す。かくの如き貴重なる事蹟のたま〳〵傳はりたるはこれ實にその木の櫻なりし爲にして櫻の史的研究は單に趣味の研究のみに止まらぬことはこの事實にても思半ばにすぐべし。

嵐山と北山

當時の京の花の勝地は何處なりしか。北畠玄慧の著と傳ふる庭訓往來に曰はく、

抑醍醐雲林院花濃香芬々自已盛也。嵯峨吉野山櫻開落交條梢繁難默止者此節也爭徒然而送光陰哉

と。醍醐の櫻會はこの時代にも頻に行はれたることは古今著聞集、體源抄、續門葉集等にて知られたり。雲林院は平安朝の初期より櫻花の名所たりしが、この頃もなほ花見の場所と知られたり。吉野山の事は事新しくいふを要せず。こ

こに嵯峨といへるは西郊一帯の地を汎稱せりと見るべし。そがうちに二尊院には永仁三年法皇新院等の櫻花御覽に御幸ありしことあり。かの定家卿の名高き小倉山莊にも櫻はありき。後にいふべき嵐山も亦嵯峨のうちなり。

後二條天皇乾元元年二月廿五日に法皇と一院と御車を連ねて所々の花を御覽じけることあり。その所は千本、五辻、栗田口、鷲尾、毘沙門堂さては岩倉の邊大原野、隨身院等なりき。これ當時名花のありし地なるべし。さては又圓通寺及び花園殿なども名花ありきと見えて花見の行幸ありき。

かくてこの時代に花の名所として新に成りし二の地あり。一は西園寺公經の北山の別莊にして、一は龜山上皇の嵯峨の離宮の眺にとて植ゑられし嵐山の櫻なり。

西園寺家の北山の別莊は公經が「西園寺といふ堂を內に構へて庭をつくり第を築きし地なり。增鏡「うちのの雪」の卷に曰はく、

いま后の御父はさきに聞えつる右大臣實氏のおとどその父殿故公經のおほきおとどそのかみ夢みたまへることありて源氏の中將わらはやみまじなひ給し北山のほとりに世にしらずゆゆしき御堂をたてて名をば西園寺といふめり。この所は伯三位すけなかの領なりしを尾張國松枝といふ庄にかへ給てけり。（中略）北の寢殿にぞおとどはすみ給ふ。めぐれる山のときは木どもいとふりたるになつかしきほどの若木の櫻などうゑ渡すとておとどうそぶきたまひけり。

山さくら峯にも尾にもうゑをかむ見ぬ世の春を人やしのぶと

この庭に山櫻の外に八重櫻絲櫻を植ゑてありしとは既にのべたり。かくてこの地はこれより後櫻の名所となりて屢花見の行幸御幸ありき。古今著聞集に曰はく、

寶治元年二月廿七日西園寺の櫻盛なりけるに御幸なりて御覽ぜられけり。と。又後醍醐天皇元弘元年三月にこの地に行幸ありて花を御覽ぜられ、十日まで御逗留ありき。その盛儀稀に見るところとす。その狀增鏡村時雨の卷にくはし。

嵐山の櫻は龜山上皇の嵯峨の離宮の眺めにとて吉野山の花を移し植ゑられ

しにはじまれり。この龜山の離宮の事は增鏡おりゐる雲の巻に、

また嵯峨の龜山のふもと大井川の北の岸にあたりゆゆしき院をつくらせ給へるをぐらの山の木すゑとなせの瀧もさながら御墻のうちに見えてわざとつくろはぬせんさいもおのづからなさけを加へたる所からいみじきゑしといふとも筆およびかたし。

かくてその前面の嵐山に櫻を植ゑしめられしことは五代帝王物語に曰はく、

さて院は西郊龜山の麓に御所を立て龜山殿と名付常に渡らせ給ふ。大井河嵐の山に向て棧敷を造て向の山には芳の山の櫻を移し植られたり。自然の風流求めざるに眼を養ふ。眞に昔より名を得たる勝地と見えたり。

と。山城名勝志にいはく、

自嵐山觀音堂二町許前道左古被移芳野時勸請藏王堂跡今存。土人呼權現ノ垣。

と。かくの如く藏王權現の堂をも模しつくられしなり。この時よりしてぞ嵐山は永く櫻の名所として世に知らるべくなりぬる。續古今集巻二に、

龜山の仙洞に吉野山の櫻をあまたうつしうゑ侍しが花のさけるを見て

太上天皇

春毎に思ひやられし三吉野の花はけふこそ宿に咲きけれ

又新千載集巻二に後宇多院御製とて、

嵐山これもよし野やうつすらむ櫻にかかる瀧の白絲

嵐山の花はかくて今の世までも名所たり。江戸時代の末期の大儒齋藤拙堂曰はく、

天下ノ名花古今首推芳野。余以爲芳野有山無水未若嵐山之最佳也。嵐山花之多雖遜芳野農槎牙而水清駛。方花時望之槎之泛、橋之臥、人之來往坐立、宛在畫圖中。余謂梅花以月瀨爲最而櫻花以嵐山爲最。皆兼山川之勝故也。余嘗遊之、戀賞至夕不能去、既遇月出益覺嬋娟。遂留宿焉。翌早候旭日升復出觀之芳霧靄然溢溪山、又爲一奇。於嵐山之景庶幾盡之。

といへり。嵐山の美また此の一文に盡きぬといふべし。

嵐山の櫻はとこしなへに榮えて今もなほわれらの思ひを滿たす。北山の櫻

や如何に。この北山の第は後に足利氏の有に歸して名高き金閣寺となりて空しく豪奢の跡を殘せり。一は權臣の占領にはじまりて空しく名のみを傳ふ。さてもかの北山の第は後醍醐天皇に對し奉りて畏くも不祥の地なれば、この西園寺の退轉と共に國花としての櫻の名所の名無くなりしは、さるからに然るべき事といひつべし。國花と皇室と國民と一致の因緣あること誠に思ひても心地よき事なり。

鎌倉の櫻

京の櫻は述べをへつ。地方の櫻や如何に。我國民の嗜好として行く所として櫻を賞せざるはなかりき。かの吉野山は今いはず。西行法師が賞したりし櫻のみにても伊勢の神路山、駿河の宇都の山、出羽の國の櫻などかぞへつべし。又衣河の櫻、志賀の櫻など諸書に散見するもの少からねど、今ただ鎌倉の櫻につきてのみ述べむと欲す。

抑も鎌倉は古より源氏相傳の緣故の地なりしが、源賴朝この地に幕府を開きてより一は武家政治の本源となり、一は關東文化の中心となり、ここに新天地は開けぬ。わが櫻史も亦この新興の地を閑却する事を得ざるなり。

鎌倉の地また櫻花に富めりしは東鑑卷卅四に、

寬元二年三月一日辛丑將軍家巡禮鎌倉中諸堂又展覽櫻花給

とあるにて見るべし。かくてその櫻花の最も名高かりしと思はるるは永福寺なりき。東鑑卷十六に、

建仁三年三月十五日甲申晴永福寺一切經會將軍家爲覽舞御出、烟露眺望櫻花艷色有興有感云々

と。同書卷廿一に、

建保二年三月九日甲辰晴及晩將軍家俄御出永福寺爲御覽櫻花也云々

とあり。この後も永福寺に花見に行きしことを載せたり。その永福寺とはかの一代の英雄源九郎義經等の菩提を弔ふが爲に創められし寺なり。英魂果してその花に滿足せしか否かを知らずと雖もここにも我等は武士と櫻花との結

合を見る。

永福寺の外には鶴岡社頭にも亦花ありき。東鑑巻四十に、

建長五年二月卅日戊寅晴鶴岡林頭櫻花盛也。酉刻將軍家爲レ覽レ彼花俄以出御云々

とあるにて知るべし。

かくて又鎌倉の内のみならで遠く三崎の地に櫻花を見むとて將軍の行きしことあり。東鑑巻廿六に

寛喜二年三月十九日辛亥晴將軍家爲二御遊覽一出二御于三崎磯山一櫻花尤盛也。仍領主駿河前司以二殊(ナル)御儲一申二案(ス)内(ヲ)一相州武州以下被參自二六浦津一召二御船一海上有レ管絃(若宮童童)有二連歌一、兩國司幷二(ニ)廷尉基綱一、散位親行、平胤行等各被二獻一秀句一云々。

廿八日甲寅天晴自二三崎一還御。

と。これ三崎の領主三浦義村の第に赴きしなるべくその滯在三日に亙りしを見れば、大規模の花見といひつべきなり。

以上の外鎌倉になほ名高き櫻ありしことは次の事以て證すべし。玉葉集巻

二に、

源氏信があとに二もとの櫻あり。名高き櫻なるによりて人々さそひて見侍りけるに程なくくれて月出でにける後おの〳〵歌よみ侍りける時

平貞時朝臣

二もとの花の光をそへむとやかすまで出づる春の夜の月

と。この作者は執權たりし北條貞時にしてその櫻のもとの主は佐々木氏信なり。氏信は東鑑、建長四年四月の條には佐々木近江大夫判官氏信と見え、康元元年七月の條には佐々木對馬守氏信と見え、弘長三年正月の條にては佐々木對馬前司氏信と見えたる人にして鎌倉武士の錚々たるものなり。この人の邸その趾今知るを得ずといへどもその地に名高き櫻二本ありしはこれにて知られたり。かくの如くなれば名を史上に留めずして空しく朽ちし木も亦多かりしは想像せらるべし。

繪巻の花

以上數節にわたりて余は當時の文獻にあらはれたる櫻花に關する事蹟を略敍したり。余はここに最後に臨みて繪畫にあらはれたる櫻花につきて一言せむと欲す。

當時の繪畫世に傳はれるもの少からずと雖も特に植物などの狀態の明かに認めらるべきは繪巻にしくはなし。櫻を描ける繪巻は石山緣起を以て最となす。石山緣起はすべて七巻、そのうち二巻は谷文晁の補筆にして五巻は古代のままのものなり。その筆者を尋ぬるに、第一、二、三の三巻は隆衆の筆第四巻は光信、第五巻は隆光なりと傳へらる。

そのうち櫻の研究に最も必要なるは第一巻なり。この巻の筆者隆衆は高階氏、官は繪所預右近大夫將監にして春日驗記、賀茂祭繪詞などの奥書によるに延慶元德年中の人たるなり。かくてこの繪巻の成れるは詞書のうちに、

于時ひとり樂浪大津宮に靈驗無雙の伽藍あることを記するのみならず。

聖化正中の曆王道恢弘し佛家紹隆せることをしらしむとなり

とあるにて後醍醐天皇御宇正中年中の作なることを知るべし。この巻中櫻花の畫きてある部は石山寺の奥なる龍穴の邊にして詞書にいはく、

當寺の西北の角にあたりて龍穴あり、水すみ波しづかにして誠に往昔の靈池とみえたり。上古の寺僧に歷海和尙といひし明德この所にて孔雀經を轉讀し侍けるに、龍王段に至りて彼名字どもをよみあげけるに隨て諸龍池の中より出現して和尙の邊に侍衞したてまつりけり。草庵へかへり給へばこれを負たてまつりつゝ親近給仕することひとへに奴僕のごとし。

と。この所には當時知られたる櫻の種類を集め描けるものにあらずやと思はるるなり。これにつきては東京美術學校校友會月報（大正九年三月發行の分）に新風景畫の基礎として見たる繪巻物と題したる穴山義平氏の論文に委しく說けり。今その文を次に抄出せむ。

櫻は殆ど何れの繪巻にも畫いてあるが其中で最も美しいと思はれたのは

石山縁起繪巻の第一巻にあるものである。此の繪は群青色の池の廻りに緑青の丘が重り合つて居る處である。此處には他の繪巻とちがつて櫻の様々の種類が畫かれて居て滿開の櫻もあり、散り初めた櫻もあり、又もう大分散り果てて葉の多い櫻もある。花は胡粉で畫いて其上に薄桃色でぼかしをなし花の廻りには岱赭色の葉が點々としてついて居る。それが花を過ぎた櫻になると暗赭の葉の枝を被うて一面に畫いてあつて其間に彼處此處眞白い花が僅に寂しく殘つて居る許りである。此の繪に於いては花や柳等の描法にはさして特殊の點があると言ふのではないけれど、一體の色調の中に何とも言ひ様のない快味があり、殊に老櫻の幹へ藤蔓がからまりついて滿開の櫻花の下に白紫とのまだらなる花の房の重々し氣に垂れ下つて居るあたり、此上もなく美しく、春の駘蕩とした氣分が如何にもよく表れて居て、描寫が細密で且象徴的である。大に感じが深い。

是に比べると藤澤道場繪巻の第一巻にある櫻は花の描き方が餘程嚴密でしつかりして居る。そして非常に古典味のある描き方である。然し特に此の櫻について言ひ度い事は其の眞白い櫻の花がバックに畫かれた、白群色の霞の上にくつきりと浮き出して極めて美しい對照をなして居る事である。此の色の配合を見ると映丘先生が言はれた様に霞を空の色として取扱つた様に想像する事が至當であると思ふ。此外に六條道場繪巻にも隨所に美しい櫻の光景が描かれて居るが、此の繪巻は一回其の模本を見た丈であるから此處に評論する事は差控へる事とする。又法然繪傳でも見たけれど、それ程特別なもので無いから略して置く。

と。專門家の言首肯するに足れり。

かくこの石山縁起は穴山氏のいへる如く數多き繪巻中にても最もわが櫻花研究者にとりて貴重なる資料なるなり。吾人はこの圖様によりて鎌倉時代に於いて櫻花の多少の種別のありしこと及び、世にその種別の認められてありし實證を得たるなり。この點に於いてこの繪巻は專門家の綿密なる考察を經べきものなるべし。

中世の巻

左近の櫻と花の宴

わが櫻史は今や近世と古代との關節たる吉野時代に入らむとす。この時代は舊物破壞せられて新儀未だ起らざるの時代にして實に新舊二時代の交替時期たりしなり。されば今は室町幕府時代以降を近世とし、この時代を古代の名殘り、近世の前期とはするなり。

さてもこの近世史の初頭に例の如く先づ南殿の櫻を顧みむとす。この花につきては既に前期の巻にも述べたるところなるが、なほ委しくその鎌倉時代の末の事を考ふるに、後醍醐天皇の御宇正中の頃にまたも栽ゑ易へられしなり。そは續史愚抄、正中三年三月の條に實泰公記等を引きて、

六日辛亥於南殿左近櫻下（件櫻前年所被栽云云）被行花宴

とあるにて知られたり。その元の櫻は枯れたりしにや老いたりしにや知るを得ずといへども、かく新に栽ゑられしことはこれによりて明かなり。

この時の花の宴に召されし人々は中務卿尊良親王を主とし、公卿は關白太政大臣藤原公平以下十一人、殿上人は藏人頭右中將藤原隆資をはじめとして人々左右に分れて座に着き、御製ありて詩歌を獻ず。その題に曰はく禁廷花と。而して詩歌同題なり。先づ和歌を講ぜしめ、次に詩を講ぜしめられたり。講じ了りて管絃の御遊あり。律呂の朗詠にこの時の御製の詩を吟ぜしめられしは珍しき御儀と申すべし。而してこれ臨時の御儀にして勸盃の儀及び祿を賜ふことなかりきとなり。さればこれ眞に文雅の清遊たりといふべきなり。按ずるに當時既に禁中の公の花宴は稀なる事となりしが如し。これ臨時の儀といへる故なるべく、その事の行はれしはかく新に植ゑしめられしが故に殊更に御催のありし事と見えたり。これより後禁中の公の花宴は史に載すること未だ管見に及ばず。恐らくは、これより後程なく世亂れて既に廢絶に歸したるものか。

正中三年より後五年元弘元年三月に天皇春宮大夫藤原公宗の北山の第に行幸ありて七日間逗留ましまして還幸ありしが、その間に無量光院の櫻の下に於いて花宴を催されき。これ禁中の花の宴ならずといへども、事の次いでにあぐるなり。かくしてより後僅に三四月にしてかの元弘の大亂は勃發したるなり。

延元元年後醍醐天皇吉野に遷幸ありて後平安京の內裡には南殿の櫻も昔ながらに咲き出でけむはもとよりなれど、正平七年には吉野朝廷に統一せられて、平安京の內裡には全く主のましまさぬ事もありしかば花もまた荒みはてたりしならむ。元中九年に天下一に歸して後南殿の櫻は如何なりしかは史詳かに記する所なし。後土御門天皇の御宇、長享元年に至りて南殿の櫻を改め植ゑられし事親長卿記に見えたり。而してその新しき樹は按察使藤原親長の家の樹を獻ぜしめられしものにて、左近衞大將藤原尙通勅を奉じて之を植ゑたり。左近大將の南殿の櫻を栽うるはこれ故實なり。されば當時なほ舊儀の守られしを見るべし。

兼好法師の櫻花觀

南殿の櫻の一重なりしことは徒然草に花の批評をものせる詞にて知られたり。その詞に曰はく、

家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし、花はひとへなるよし、八重櫻は奈良の都にのみありけるをこのごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花左近の櫻皆ひとへにてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり、植ゑずともありなむ。遲櫻またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。

と。これかの名高き卜部兼好が隨筆にして當時の上流の趣味をあらはしたるのみならず、これによりて當時の好みと流行とを察するを得るなり。ここに、吉野の櫻と左近の櫻とをひとしく一重なりといへるは、かの昔、吉野の種を南殿に移しうゑしめられてより後改め植ゑらるるときは必ずその種の櫻の他に存せるをとられしものと傳へたれば、彼も是も一重なる事まことに然るべきことといはざるべからず。その他、八重櫻の漸く世にもてはやされしこと、又遲櫻とて一種別にありしをも知るを得べし。

徒然草に又曰はく、

花の盛は冬至より百五十日とも時正の後七日ともいへど、立春より七十五日おほやうたがはず。

と。これ花期を說けるものにして、彼れが漫然と花を見ずして意を注げるの深きを察するに足れり。彼又曰はく、

花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへしらぬもなほあはれになさけふかし。咲きぬべきほどの梢散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌のことばがきにも「花見にまかれけるにはやく散りすぎにければ」とも「さはる事ありてまからで」なども書けるは「花を見て」といへるにおとれることかは。花のちり月のかたぶくを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくな

なる人ぞ「この枝かの朶散りにけり、今は見所なし。」などはいふめる。萬の事もはじめをはりこそをかしけれ。（中略）すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそいとたのもしうをかしけれ。よき人はひとへにすけるさまにも見えず。興ずるさまもなほざりなり。かた田舎の人こそ色こくよろづはもて興ずれ。花のものとにはねぢより立ちよりあからめもせず、まもりて、酒くみ連歌して、はては大なる枝心なく折りとりぬ。云々

といへり。これ實にかれの櫻花に對する趣味を遺憾なく發表せるものにして、ここにいへる如き、俗流のなす所は古今に通じて存するものをかしき事といふべきなり。

この人かく花に趣味をもちたりしかば、その歌にも嵐山、西山、大原、吉野などの花の名所をめぐりてよめる歌彼是見ゆ。彼は又洛西、雙が岡に豫め無常所を設けて、そのかたはしに櫻を植ゑさせける事ありといふ。その時の歌、

契りおく花と雙の岡のへに
あはれ幾世の春を過ぐさん

かく櫻と共に永くその所の土とならむと希ひしこと、彼が、わが櫻花黨の一人なりしことを證すといひつべし。而してこの雙岡の櫻の一重なりしことは彼が主張よりして疑ふべくもあらざるなり。

花のまごころ

かの元弘の北山の御花見の後程なく世の中騒しくなり、はては、關東より軍勢を上せて勅命に對捍し天下の大亂とはなりにけり。後醍醐天皇は山城の笠置山にましましを東軍遂に攻め落し天が下には御隱家もなき世となり、北條高時陪臣の身を以て恐くも一天萬乘の君をば隱岐國に遷し奉るべしと定め了りぬ。

時はこれ元弘二年三月七日の巳刻ばかり天皇都を出でさせ給ひぬ。隨ひ奉るもの女房三人、男には中將一條行房、少將六條忠顯のみなり。千葉介貞胤をは

じめ名ある武士十人各手兵を率ゐて護衛し奉る。あはれに悲しき事ぞかし。淀、昆陽野、蘆屋の里、須磨の關、明石の浦、野中の清水、高砂の松など名ある所々を御覽ぜらるれど、かきくらす御心地に御目もとまらざりきと傳ふるはことわりとも申すべし。

播磨にて名も知らぬいと高き山の峰に花おもしろくさきつづきて白雲をわけゆく心ちするを御らんじては御心も少しくなごみましけむ。御製あり、

花はなほうき世もわかずさきてけり
　みやこも今やさかりなるらむ

あとみゆる道の栞のさくら花
　この山人のなさけをぞしる

さるにても都の花をおぼしやらせ給ふはげにもとは申しながら涙催す御事なり。美作國におはしては御心ちなやましくましまして、しばし御逗留ありき。ここに三月廿一日雲清寺といふ所にて面白き花を折りて忠顯奏しける。歌、

かはらぬを形見となしてさく花の
　都はなほもしのばれにける

御返し、

色も香もかはらぬしもぞうかりける
　都の外の花のこずゑは

又小山の五郎といふ武士に同じ花をやるとて、少將のよみける歌、

うきたびとおもひははてじ一枝の
　花のなさけのかゝるをりにて

かくて日數も山もかさなるにそへて花の梢をうつろひまさりつつ、上り下る九折にいと面白く散り積りて村消えたる雪の心地するを御覽じては、

花の春又見むことのかたきかな
　同じ道をば行きかへるとも

あはれ一天の下、勢につきて聲をのみ、君の大御心を慰め奉らむとする者とてはあらざりし世に、かかる片田舍の名もなき花のみはさすがに御心を慰め奉りける。面白きにつけ、悲しきにつけ、わが日本人の心を慰むるはげにも櫻にぞあ

りける。かの心なき東男もその一枝の花の情には涙の露のかからざりけむやは。

その比備前國兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座有りし時御方に參じて義兵を揚げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠も自害したりと聞えしかば、力を失うて默止しけるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて臨幸の路次に參り會ひ君を迎へ取り奉りて大軍を起し義を天下に唱へむと志し、武心なき一族共を率ゐ、然るべき難所なりとて備前と播磨との境なる船坂山の巓に隱れて待ちたりけるが、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかかり、遷幸を成し奉りける由聞えしかば、さらば美作の杉坂こそ窮竟の深山なれ、此にて待ち奉らむとて立石の山より眞直に道もなき山の雲を凌ぎて杉坂に着きたりければ、主上はや院の庄へ入らせ給ひぬと申しけり。高德が支度再度相違したりければ、今は力及ばずとて一族共とちりぢりになりにけり。

高德思ふやうさりとて己が志は遂げで置くべき事ならず。さるにても此の所存を先づ上聞に達せば大御心を慰め奉るはしともなりなむと思ひける間、ただ一人微服潛行して時分を伺ひけれども、然るべき隙もなければ、或夜君の御座ある御宿の庭に紛れ入り、大なる櫻木有りけるを押し削りて大文字に一句の詩をぞ書き付けたりける。

天莫空勾踐、時非無范蠡。

折しもあれ花爛漫の好時節。御警固の武士朝に之を見付けて怪み見れど、何事を書きたるやらん、讀みかねしかば、かねて花の情を知れる武士則ち上聞に達してけり。主上はやがて詩の心を御覺りありて龍顏ことに御快く笑ませ給へども武士共は敢へてその來歷を知らず、思ひ咎むることもなかりけり。

あはれ、院の庄の櫻の花よ。さらでだに花には大御心の慰みたまひしに、この櫻こそは千萬無量の御慰めとはなりしならめ。高德の己が孤忠を范蠡に比して千般の思ひを一句に托し叡聞に達しけるも櫻にてありしからにこそあれ。あはれ皇國屈指の忠臣と皇國の精華たる櫻花とげにもふさはしき配合といふべきなり。千載の下嘖々として人口に膾炙するは偶然の事にはあらずといふべし。この遺蹟は今や作樂神社として永く忠臣の芳と美とを今に傳へたり。

雲井の櫻

延元元年後醍醐天皇足利高氏の幽閉をうけたまひしが、十二月に潜に吉野に入らせたまひ、一時吉水院にましまし、後に實城寺に入りまして之を行宮と定めたまひぬ。

翌年の二月半過ぎ行く程に雲井の櫻とて、世尊寺のほとりにありける花の咲きたるを眺めさせ給ひて、詠ませたまひける大御歌。

ここにても雲井の櫻さきにけり
ただかりそめの宿とおもへど

凡そ雲井の櫻と歌によめるは多くは禁中の花をさせるなり。然るにここに詠ませ給へるはもとよりさる名の附きし樹のありしなり。この櫻如何なる花なりしか往時の大樹は既に朽ち果てて、今はその傍に若木の絲櫻一本あるをばかく唱ふなり。

この朝の柱石准后北畠親房にも亦この櫻をよめる歌あり。

吉野山雲井の櫻君が代に
あふべき春やちぎりおきけむ

と。げにもこの花の名の如く吉野は九重の大宮處となりしこと不思議の縁といふべきなり。かくてこの櫻よ。いかに上下の人の心を慰めけむと思ひやられてゆかしき極みにぞある。

同じ御時山の櫻をながめさせ給ひて勾當の內侍に、

「折ふしの移りかはるにこそ。昔の歌に、
おしなべて木の芽もはるとみえしより花になり行くみよしのの山
とよみつる時はこの山をまだ見ざりし。今はただここに住み馴れてその折節の戀しく思ひ出でらるるはいかに。」

とのたまはすれば、內侍も共にうち泣きて

いにしへを忍ぶ涙はみよしのの
吉野の山の花のしら露

と奏しければ、いたく哀れがらせ給ひけり。折ふし雁の通りければ、「かく心なく雁こそ歸れ」とのたまはせ給ひければ、内侍、

雁がねにわが身をなさばみ吉野の
　花も見捨てゝ歸らざらまし

となむよみける。誠にあはれ深き物語にこそ。

塔尾の花

延元四年八月後醍醐天皇吉野の行宮に崩御ましましぬ。如意輪寺の後塔尾の御陵に葬り奉る。ここに栗田久盛といふ人あり。御陵のほとりに櫻を千本植うべきよし思ひ立ちて年々にうゑけるがやう〳〵花も咲きければよめる歌、

植ゑおかば昔の下にもみよしのの
　御幸のあとを花や殘さむ

誠に志深き事といひつべし。今もこの山陵の下のあたりに多き櫻はこの久盛

朝臣の心づくしの名殘にぞあるべき。

吉野の行宮を賀名生に遷されて後正平五年の春新待賢門院塔尾の御陵に詣で給はむとて吉野山に登らせ給ひけるに、藏王堂をはじめて多くの坊舍ども皆兵火に煙と立ちのぼりて跡だにもみえずなりつるに御陵の花ばかりは昔にかはらず咲きてなつかしく思召されければ、哀に覺えさせ給ひて一房御文の中に包み加へさせ給ひて信濃にませる宗良親王に賜はせける御歌、

みよしのは見しにもあらず荒れにけり
　あだなる花はなほ殘れども

宗良親王の御返し、

今見てもおもほゆるかなおくれにし
　君がみかげや花に添ふらむ

たづねみん人のためにや殘りけん
　おなじかざしの三芳野の花

かくて後正平十三年、新待賢門院薨ぜらる。宗良親王遙かに之を聞きて追慕

の情に堪へず、先年賜はりし消息を取出して繰返しよむに、かの花の一房の凋めるがありし昔を語りがほなるを見て、

たづねても今はた誰かみよしのの
　花の昔をわれに語らむ

金枝玉葉の御身にして南征北伐、父帝母后の御最期にもあはせたまはざりし御心の中おしはかられてあはれなり。

吉野の花の嵐山

後村上天皇の御宇かとよ。彌生の比、日のうららかなるに、女院御所の御庭に散りつもりける花のいと多かりければ、伴の御奴召させ給ひて一處に集めさせたまへば、高さ五尺ばかりの山のなりになりにけり。かかる事は吉野ならではかけても及ばぬ事なるべし。いと興ある事に思ひたまひて、吉野の花を移ししし山なればとて嵐山と名づけさせ給ひて人々に歌よませ、上に奏したまひければ、

明日の程にも渡らせ給ひてむとのたまはせ給ひけるに、その夜風の烈しく吹きていひがひなくなりにけり。朝になりて兵衛典侍の局、

み吉野の花をあつめし山の名も
　今朝はあらしの跡にこそあれ

とよみて辨内侍の方に遣しけるを奏しければ、

千早ふる神代も聞かず夜の程に
　山を嵐の吹きちらすとは

とのたまはせて、いたう懐しがらせ給ひけるとぞ。

凡そ吉野朝廷の御事は悲しき事のみぞ多かる。戰と花とこれ五十有餘年の間の史を綴れる要素なり。歌書よりも軍書に悲し吉野山。悲しきがなかにも忠孝の道の纔かに保たれたるはただこの期あればなり。あはれ、若し花なくば、この期の人々誰か一日も安かるべき。げにも櫻ありての吉野山なるのみならず、花ありての吉野朝廷なりしなり。請ふ見よ、この朝唯一の歌集新葉和歌集を、而してその如何に花の歌の多きかを。後の世の人、この花とこの朝廷とを思慕

してやまず、かくて、多くの詩歌を殘せるが中にも、明治維新の黎明期にはことにすぐれたる作多し。今その中より、ことに人々に膾炙する詩三首、所謂芳野三絶をあげむ。

萬人買レ醉攬二芳蕤一　感慨誰能與レ我同
恨殺殘紅向レ北飛　延元陵上落花風　　賴杏坪

古陵松柏吼二天颸一　山寺尋レ春春寂寥
眉雪老僧時輟レ箒　落花深處說二南朝一　　藤井竹外

山禽叫斷夜寥々　無限春風恨未レ銷
露臥延元陵下月　滿身花影夢二南朝一　　河野鐵兜

更に勤皇の志士梁川星巖の詩を見よ。

今來古往事茫々　石馬無レ聲抔土荒
春入櫻花滿山白　南朝天子御魂香　　梁川星巖

かくの如くしてこの花と史實とに醞釀せられて芳野は勤皇の靈場たりしなり。

鎌倉櫻

さても北京の櫻はいかに、園太暦を按ずるに延文二(正平十二)年三月十九日の條に、

南殿渡二栽櫻樹一殊絶美花也。號二鎌倉櫻一。

と見えたり。ここに南殿とあるを見れば、或は左近櫻なるが如しといへども、恐らくはさにあらずして別の庭に栽ゑられしものなりしなるべし。

この鎌倉櫻とは如何なるものなりしぞ。世に傳ふ、今いふ桐ヶ谷又車返し、八重一重といふ櫻は元鎌倉桐ヶ谷より產せる故に桐ヶ谷の名あり、又鎌倉櫻ともいふと。活所櫻譜に曰はく、

桐谷爲二櫻第一色一白而微紅蕊尤長。原出二鎌倉桐谷一。

と。かくの如く古來花中の第一品とせられしものにして、一枝の中に八重と一重と相雜り咲き、その中にも八重多く一重少しとす。今之を以てかの鎌倉櫻に

充つるに蓋し當れるものなるべし。果して然らば、少くとも五百六七十年の昔にこの花が鎌倉の産にてありしを思ふと共に、當時の鎌倉は元弘の亂に燒野となりて荒れ果てたれば、かかる園藝を玩ぶべくもあらざるべければ、これを以て鎌倉幕府盛時の餘波とすべきに似たり。而して之を當時京に接木の行はれし證あるに照して考ふれば、何人か一重と八重とを接ぎて養成したるものにあらざるか。何れにしても鎌倉幕府の時代に既に園藝品種の多少存せしことはこれにて想像しうべきなり。

桐ヶ谷の名も古くより唱へたりと見え、やや下りたれど次の如く、文獻に散見す。その古きは禪佛寺の花なり。永享嘉吉頃の禪僧臥雲山人の號を以て聞えたる瑞溪の之が詠ぜる詩翰林五鳳集にあり。曰はく、

洛之禪佛古寺櫻桐ヶ谷盛開

佛寺金銀花亦開　都人爭覩相公來　村僧何幸伴臺席　白髮逢春又一同。

と。更に下りて季瓊日錄を見れば、

勸修寺梅花尤美由御談余也。禪佛寺花名桐谷。與世上之花十日許遲晩之由。西芳寺花爲最。

とあり。以てその花期をも考ふべきなり。禪佛寺は京の七條東洞院にありし寺にしてもと足利高經の第なりしをその沒後喜捨せしものと見ゆれば、その桐ヶ谷は或は高經の時のものが、歿後そのままに傳はりしものならむ。

西芳寺

西芳寺は西山の内松尾の南葉室にあり。元、西方寺といひて、古來の名刹なりしが、その檀那佐々木親秀夢窓國師に歸依してその大道場となし、名も西芳寺と改めしなり。足利高氏亦夢窓國師に深く歸依せしによりてこの寺愈榮えたり。この寺に櫻ありてしかも當時京洛の最とせられしことかの季瓊日錄に見えたり。

西芳寺の名花は兩株の櫻にありしなり。夢窓の集に曰はく、

西芳精舍に御幸なりて兩株の佳花歷覽ありける翌日に奉られける

竹林院内大臣　于時大納言

めづらしき君が御幸を松かぜに
　ちらぬ櫻の色を見しかな

と。これ蓋し康永元(興國三)年三月に光嚴院の行幸ありし時の事なるべし。院の花見にここにいでましししことはこれより後再三あり。彼集に又曰はく、

征夷將軍(于時亞相)幷典厩(義詮)西芳寺に來臨法談之後庭前兩株之佳花賞翫之次に人々うたよみけるに云々

と。これらにてその櫻の兩株存せしことは知られたり。然れどもその花の如何なりしかは之を知るに由なし。

西芳寺に足利將軍の屢赴きしは一は夢窓國師に謁せむが爲にもありしなるべきが花ももとより名花なりしによるべきか。これより後足利幕府時代を通じてこの花を賞せしことを記するもの枚擧に遑あらず。

赤葉の八重櫻

八重櫻のやうやう世にもてはやされしことは徒然草に既に之をいへり。その後これのもてはやされしことはいはずもがなの事なれど、少しく之を說かむ。

堯孝法印日記文安三年三月の條に、

廿四日祭の日智藏がもとよりかつらの枝に付て申侍し、

ぬるがうちに神のみせける花ぞとは
　けふのかざしに思ひ合はせて

夢に八重櫻を鉢にうつくしくそだてたるをよがもとへ人のたびたるをこれかれあまたきてみはやしもて遊び侍るよし覺ゆるとて如此申云々

と。これにて八重櫻をもてはやしたるを知ると共に我等は鉢に植ゑ育つることの當時既に行はれしを知るを得たり。

後奈良院宸記天文四年三月の條を見るに、

四日　知恩寺長老八重櫻枝進上、

七日　自中務卿宮八重櫻枝給之、青蓮院花枝給、

と書かれたり。これらも後の事なれど事の序にあげつるなり。

ここにこの期の八重櫻として見過すべからぬ一事こそあれ。斑鳩嘉元記を按ずるに、

延文五年庚子二月廿八日小泉覺禪房方（此本貞治二年癸卯夏初枯失了四ケ年ニテ失ス）より赤葉八重櫻二本給了天王寺五智光院櫻を繼留云々之内一本聖靈院前東奉レ植、一本東室前奉レ植　此木程無枯畢

とあり。この記は法隆寺の記錄なるが、我等はこれによりて赤葉八重櫻といふものの當時存せりしこと天王寺に名高き櫻のありしこと又この頃も盛に繼木せしことなどを知るを得たり。

これらのうちにて赤葉八重櫻とは如何なるものなりしかは一考を費す價値ありとす。思ふにこの赤葉といへるはその若芽の色をさせるものなるべし。然らばこの赤葉の八重櫻といへるは今の南殿櫻、麒麟關山、普賢象、熊ヶ谷櫻のうちか又はそれらに似たるものならむ。或は思ふに、普賢像は當時恐らくは既に存せしものと思はれたればこれをさせるにあらざるか。而してそれを普賢象といはざりしは田舍の人にて名を知らざりしによるものならむか。いづれにしても赤芽の八重櫻を既に認めたりしは我等の輕々しく見過すべからざる事なりといふべし。

大原野の花

一條兼良公の尺素往來に曰はく、

地主鷲尾以下所々花下近年零落無念之事候。於二邊土一者大原野古神代春可所想像候。

同じ人の著にやと傳へらるる身の形見に曰はく、

花紅葉を人につかはす事大はらのの花くろ谷の櫻あらしのもみぢなどはまゐらせてもくるしからず。

と。かくまでにもてはやされし大原野の花は抑も何處にありしぞ。西山のうち樫原より西南二十町ばかりにある高原これ卽ち大原野にしてこの地一帶古より櫻の名所なりしが、そこに小鹽山勝持寺といふ寺あり。大原野寺ともいふ。この寺今は衰へて一坊のみ在れど、往時は四十九院巍々として嚴重なりし大寺なり。この寺に西行の植ゑしと傳ふる名木あり。その木のさまは大原山家記に、

かしこにあやしき櫻あり。根は五またにわかれてかこみは牛もかくしつべし。

と見えたれば、稀有の大樹たりしを知るに足る。かかりしかば大原野の花としもいへばこの寺の花をさし、この寺をば古より花の寺とは唱へ來れり。

大原野の花は往古より名高くて世にもてはやされしが、この期に至りては一層著くなれりしなり。かくて或は將軍その他已下の人々の行きてもてはやししことは一々あぐべくもあらぬ中にも世にも驕奢の事蹟のこの花によりて傳はれるを語るべし。

太平記によるに貞治五年(正平二十一年)三月四日を點して、將軍の許には花下の遊宴あるべしとて催されしが、當時の權臣佐々木佐渡判官入道道譽かねてより將軍に怨を含む事ありて、いつかは之を晴さむと思ひければ、かねては參るべき由領狀したりけるが、當日に至りてわざと引き違へて京中の道々の物の上手どもを獨りも殘さず引き具してかの大原野の花の本に宴を設けて世に例なき遊びをぞしたりける。その裝ひをいはば、勾欄を錦にて裹みて、擬寶珠に金薄を押し、橋板に綾錦を布き、紫藤の屈曲せる枝毎に高く平江帶(織物の名)を掛けて、下に香を薰じたり。本堂に上れば十圍の花木四あり。此下に一丈餘の鍮石の花瓶を鑄かけて一雙の生花に作りなし、その交ひに兩圍の香爐を兩の机に並べて一斤の名香を一度に炷き上げたり。花の蔭には幔を引き曲彔を立て雙べて百味の珍膳を調へ、百服の本非の茶を飲みつつ、猿樂白拍子の舞を催し、懸物を山の如くに積み置き、人々の興に乘じて之を投げ與ふるにまかせたりといふ。これ將軍の催を壓倒せむが爲にして、當時將軍自ら非道を以て天下を支配したれば、臣下の驕慢を制する能はず、下剋上の風次第に募り、ばてはかかる不思議も出で

來しなり。

大原野の花はかかる忌はしき事にてけがさるべくもあらず。われはこの後に行はれし文雅の會を述べて、その名譽を世に傳へむと欲す。されど、そは時代下りたれば、次の巻に讓り姑く筆を擱かむ。

近世の巻一

花の御所

わが櫻史は室町幕府の時より以降を近世本期とすること既に述べたるが、これは元中九年天下一統に歸したりしより後の時代をばいふなり。その室町幕府と稱するは足利將軍が室町の第に在りて天下に號令したりしが故にぞある。さても室町の第は何處にありて何時頃に成りしものとかする。

平安城今出川北小路の北、室町の東にあたりて一第ありき。これ後光嚴院の御所なりしが、一年炎上の後御造作もあらざりしかば、足利義滿申し請け、前右大將公直の菊亭の跡をも併せて一となし、土木の業を起しぬ。天授四年北朝永和四年三月に功成りて義滿新亭にうつりぬ。これ實に元中元年に先だつこと十

五年のことなり。この新第は卽ち世に所謂室町殿にして、これより後足利將軍をも直ちに室町殿と稱するに至れり。

室町の殿は結構に華麗を盡ししのみならず、山を築き池を掘り、水石の美、草木の麗、目もあやなりしがうちに、特に著しきは種々の名ある櫻をば數を盡して植ゑたりしことなり。かかりしかば、時の人之を賞して花の御所とは呼びけるとぞ。この花の御所よ。世の人々のもてはやししのみならず、又時々院の御幸、主上の行幸ありて面目を施ししこと屢なりき。それがうちにもすぐれて名高く聞えしは、弘和元年北朝永德元年三月後圓融院の花見の御幸のありし時の事なり。その盛儀のさまは「さかゆく花」の卷に見えて詳かなり。

花の御所はこれより後世々足利將軍の居邸となり室町殿の勢威は咲く花の匂ふが如くに盛なりしが、かの應仁の大亂に京となく、田舍となく、人心大に荒みて、將軍の威令も殆ど行はれずなりしと共に、はては花の御所さへ、文明八年十一月十三日の夜半、兵火にかかり殿舍一宇も殘る所なくなりぬ。かくて花の御所はつひに舊に復することなく、足利將軍の權威また地に落ちて、天下は慘憺たる戰國の巷となりぬ。あはれ足利將軍家の權威と花の御所と榮枯盛衰を一にせしことこれ偶然の如くにしてしかも必ずしも偶然にはあらざるならむ。

北山殿行幸

天下一統してより室町殿の榮えは終に義滿をして太政大臣准三后たるに至らしめき。ここに應永十五年三月八日後小松天皇、前相國入道准后道義（義滿法名）の北山の第に行幸あらせられき。その時のありさまは、時の關白經嗣の北山殿行幸記に詳かに傳へられたり。それが中に、櫻を植ゑられしことあり。曰はく、

此年月たま鏡と磨かれたる上に、二なう猶つくり整へられたれば、目も耀くばかりなり。もとの木たち山のたたずまひも己と所を得たるに花の木どもをも植ゑそへられて、總門のうち一町あまりの馬場には西東わけてひまなくひしと植ゑならべたる櫻八重一重こきまぜて今を盛とこの御幸を待かけたるも心有がほなり。

かく、櫻花を集めて御覽に入れ奉りたるのみならず、御割子には花の枝、散る花などを飾り三船を浮べて御會あり、御詩題には「池臺花照宴」和歌御題には「花契萬年」といふ。その外連歌鞠の御催あり、舞御覽などもありて十餘日にして還幸なりぬ。實に當時稀なる盛儀とぞおぼえし。

普賢堂

北山殿の行幸は花の面おこしにてありしが上に、これによりて名ある花の世に著しくなりしこそ思白けれ。

平安城の北、朱雀大路（今俗稱千本通）の末に當りて引接寺といふあり、俗に千本の閻魔堂といふ。毎年二月十五日より涅槃會供養の爲に大念佛を催し、貴賤老若群集して古來名高き佛事とせり。この寺かの北山殿に近かりしかば、御幸のありし時延引せしめられしより後恒例となりて三月花盛の頃行ふこととはなりぬ。この際に義滿その寺に名花あるを聞きて所望せし事あり。その事は塵

塚物語に傳ふ。曰はく、

一北山行幸の比は應永十五年春となり。則釋迦念佛恆例の法事にあたり、洛中群をなして喧しかりける間停止すべきの由將軍義滿公より仰下さると云々。則上使斯波治部大輔義重をもつて彼等へ仰ありて云、此てらのさくら名木のよし上聞に達す。一枝を捧べし。因之彼住僧大枝を手折て進上す。その時將軍大きに御立腹まし〳〵かさねては小枝を切てさし上べし、名木の大枝無情非可折取と云々。扨御下行米を下されて當世まで退轉なきは右之謂なり。

といへり。名木を重んぜしこと流石に風流を解せりといふべし。この名木は卽ち今に傳ふる普賢象といふ櫻の源なり。同じ物語に又曰く、

同所名木の櫻あり、普賢象云云

此さくらの花盛を待て一枝を公方家へ進上して翌日より念佛を始むると云々下行米五十石を給ふと也。

一普賢象といふは古來より名高き花木なりといへり。宇多天皇雲林院御

幸あそばされてはなをえいらんさせ給ふ此時菅家御供し給ひ青色を謝し給ひ、勅命によりて詩賦御作文の事當代までつたふる事也。此ふけん象は其種流なりと。云々

塵塚物語の傳說は悉くそのまま信ずべきにはあらざらむ。然れども古くより普賢といふ名木のありしことは、碧山日錄長祿三年二月の條に、

二十六日佛乘超侍者開二頌筵一以二普賢折花一爲二題頌一焉

と見え、又千本が櫻の名所なりしことは親長卿記に、

明應四年二月十三日參詣千本釋迦堂遺經聽聞。次千本櫻一覽了

とあるにて明かなり。又これらが普賢堂といはれしことは小補絕句に橫川の詠ぜる詩あり。

春暮看花、普賢堂花

杜宇聲中春欲闌　城西櫻雪一株殘　人生易レ逐二落花一變　暗想明年子細看。

この花橫川の詩に見る如く、もと普賢堂といひしをいつしか誤りしならむ。これにつきて橫川の別に詠ぜる詩とその序とあり。事長けれどわが櫻史には省くべからず。次にこれをのす。

謝二人惠一櫻花一詩並叙

櫻之於二我國一也、不レ曰レ櫻曰レ花、如二洛之牡丹、蜀之海棠一、蓋所二以貴一之也。世傳鎌倉有二堂普賢安一之、其地有レ櫻俗謂二之普賢堂一。或曰二普賢象一。和訓鼻與レ花音同、花之白且大者如二菩薩所一レ乘白象之鼻一也。兩說孰是。平安城之西有二此櫻一、實名花也。萬年之距二此地一也里許、近而近。每レ到二春時一携レ客出遊、何一日無二此花一耶。自二丁亥一之亂東西鴻溝不レ見二普賢堂一者七八九年于今矣。跬步之間雖レ花如レ敵。青春負レ公乎、公負二青春一乎。不レ可レ得而知一也。今玆甲午西人乞レ降軍退解レ圍、不二亦悅一乎。今日有レ客惠二櫻花一者普賢堂也。予與レ花一咲如二十年之舊一。吁異哉。不二啻生逢一太平一、日而得レ見二此花一、幸之幸也。感喜有レ餘作詩謝之。

七年不レ見普賢堂、蝶亦東西難レ過レ墻、亂後逢レ花春似レ夢、一枝晴雪滿衣香。

以てこの花の由來と、應仁文明の大亂に京中花見の事も自由ならざりし實情とを見るに足るべし。長與宿禰記文明十三年の條に、

三月六日　今日嵯峨釋迦堂大念佛始也、一亂中無沙汰當年與行云々

とあり。かの大念佛も亦これより復興せしを見るべし。

これより後かの普賢堂櫻たえずもてはやされしならむ。宣胤卿記に曰はく、

文龜二年三月九日詣千本念佛普賢堂櫻花盛也。

と。この花江戸時代迄存せし事は、和漢三才圖會に、

庭前有櫻名普賢像折花獻京師所司職則賜米三石餘用之十箇日勤花鎮融通踊念佛以爲恆例

とあり。この花の枝を獻ずるはかの義滿の時よりの恆例なりしならむが、將軍家退轉の後は下行米も三石餘に減じたりしものの如し。普賢像は普賢象の訛なり。この花の種は今は所々に傳ふれども、本寺には絕えたりといふ。

信濃櫻

この頃また信濃櫻といへるあり。翰林五鳳集に載する瑞溪の詩に曰はく、

細川典厩源公宅庭花盛開俗所謂信濃櫻也、一日偶陪席、公就求詩、聊呈小絕。

主人胸宇浩無涯、四海九州春一家、庭下白櫻千樹雪、洛陽坐看信陽花。

この信濃櫻といふもの又亞槐集九にも見えたり。曰はく、

侍從大納言實隆卿許よりしなの櫻のかへり花の枝さして、

待ちつけん人の見かたき宿なれや
　年の稀なる花は咲けり

と。この花如何なる物なりしか、信濃國に產せし名花なるべけれど、今之を知らず。識者の敎を請ふ所なり。

絲櫻と彼岸櫻

絲櫻の事は前の卷々にもいへるが如くはやくもてはやされしが、古くよりの名所には法勝寺ありて、この期にもなほ花は昔にかはらず盛なりしなり。濟北集にこれを詠じて曰はく、

梵苑春酣花發遲、一株傾蓋九重城、天仙玉帶垂斜下、界道金繩束未縈。

絲櫻は當時もてはやされて處々に植ゑられきと見ゆ。應永三十一年二月卅日には院に於て絲櫻御覽の御催ありき。

仁和寺の東北に龍安寺といふあり。この寺は細川勝元の創立せし所なるがここにも亦絲櫻ありて名高かりき。五鳳集に仁如の詩を載す。

見龍安寺絲櫻

春色闌時意自知、花前開宴共相歌、繰絲欲繫好風景、情似櫻樹頭緒多。

この龍安寺は聚樂第に近かりしかば屢豐太閤の訪ふ所となり、絲櫻も亦そが詠に入りて更に世に名高くなれり。その歌、

時ならぬ櫻の枝に降る雪は
　花をおそしと誘ひきぬらん

これ天正十六年春の事にして櫻花未だ綻びず、淡雪のふりしかばよめるなり。

二水記天正七年の條に次の記事あり。

二月二十七日午時中院姉小路等令同遂靜寂院絲櫻令見物也。其盛也雖爲不珍事、其枝及地低、只如柳絲也、凡無比類者歟。

その樹の狀見るが如し。然るにこの靜寂院といふ寺院所在詳ならざる由はやく、山城名勝志にいへり。然るにここに醍醐寺中に寂靜院谷といふあり。竹林抄に心敬僧都の發句を載す。曰はく、

醍醐山寂靜谷といふ所の花見侍りしとき
　ちる花のをときくほどの深山かな

と。名は似たりといへども所は異なり。しかも共に櫻の名所なること面白しといふべし。

近世に於いて絲櫻の名高きは平安城近衞辻子の東なる近衞家の別第なり。この第の絲櫻の古く物に見えたるは五鳳集に、「賞近衞殿絲櫻」といふ詩を載せたるにてしるし。引つづきて名高かりしは玄與日記にその第を「近衞殿絲櫻の亭」といひ、慶長二年二月廿四日雨ふれるに絲櫻をよめる歌二首を寄す。その一首、

春の雨に絲くりかけて庭の面は
　みだれあひたる花の色かな

絲櫻は京中のみならず地方にも多かりしなるべし。稱名院吉野詣記に大和國眉間寺に至りし時絲櫻さかりなりし記事あり。

地方にありて著しきがうちにもすぐれて聞えしは越前國南陽寺の絲櫻にぞありし。この寺は一乘の谷朝倉氏の居館より東北に當れる地にありしものにして、

地景無雙ニシテ庭前ノ絲櫻世ニ隱レ無キ名木也

と傳へられたり。時はこれ永祿十一年三月下旬、朝倉義景は前に己を頼み來たる足利義昭をかの南陽寺に請して花見の宴を催し、終日歡を盡しき。その時の詠歌少からず。一二をあぐ。

夕月夜しばし休らへ絲櫻　　暗食明慶

花のしなひに結ぼほれつゝ

打はへて風にかたよる絲櫻　　武田信堅

こやさほ姫の花の衣か

かくも名高かりし南陽寺も、天正元年八月十八日朝倉の沒落につれて灰燼と

なりはてかの絲櫻も亦烏有に歸しぬとぞ。

絲櫻は後世枝垂櫻といふ。これ卽ち彼岸櫻の變種なりとぞ植物學者はいふ。さらば、絲櫻の在る以前に彼岸櫻のありしことは疑ふべからず。されど、彼岸櫻の名は絲櫻の名よりも遙に後れて物に見えそめたり。恐らくは名なくして傳はりしならむ。彼岸櫻の名の見えたるは二水記、大永七年の條に、

二月廿四日午後向姉小路亭彼岸櫻其盛也、仍有銚子事、及夜中。飮食宴甚興有。

とあるや古かるべき。

後奈良院宸記には天文四年二月の條に

十四日乙巳晴陰夜雨……師鄕彼岸櫻枝進上今日彼岸也

二十日辛亥天晴……議定所庭彼岸櫻若ハ花始開云々自愛々々今日彼岸結願也

と載せられたり。これより彼岸櫻の名、物に散見す。

花の色々

碧山日錄長祿三年三月の條に、

三日……水北早櫻盛開、與倫叙七澤僧行賞之、小櫻之上下、白雪壓枝、一春之芳事、皆不出此花之上矣。

とあり。この小櫻といふは櫻の一種なりや、はた唯花の小き由をいへるか、未だ詳ならねども、その早櫻といひ小櫻といふは彼岸櫻をさすものと思はれたり。

大永の頃の連歌師宗碩の編せし藻鹽草といふ書あり、それの櫻の條中に櫻の名と認むべきものをあぐれば、

うす櫻　かさり馬の唐鞍の雲珠にそゆるなり、されば、くらまの山のうすさくらなと云り。

八重櫻

ひむろ櫻　六月にさく櫻の名なり、富士にはさくなり、又六月櫻共云是もひむろ櫻の事なりと云々

雲井櫻　人丸櫻

などなり。それらのうち、詳かなるを知るべからねど鞍馬に名花ありしことは、教言卿記に應永十四年の條に、

三月三日北山殿鞍馬花歷覽ノ爲御成……細川今日御供云々目出々々

と見えたるなどにて知るべし。されど、これ必ずしも鞍馬に雲珠櫻の在りし證とはいふべからず。雲珠の緣にて鞍馬につづけしにてもあるべきか。そはいづれにしても雲珠櫻といふ一種の既に存せしことは證せらるべし。

ひむろ櫻といふは今いふ富士櫻、又は豆櫻、おまき櫻といふものの事にあらざるか。雲井櫻人丸櫻今いづれもさる名あれど、古のままに傳はりしか否かを詳かにせず。

慶長三年御湯殿上日記に、

三月四日……西のとういんより海棠櫻進上

と記せり。これによれば當時既に海棠櫻といふものありしならむ。

東山の花

洛北洛西にありし花の名所として大原野、西芳寺の事は既にいへり。而してこれらの名所の花盛は、先づ幕府に報ぜられしものと見えたり。年中恆例記にいはく、

三月三日……

大原野より櫻の枝竹筒に入て進上、是は日不定、花盛の御案内のため也云々

西芳寺へ爲花渡御日不定、常在光寺同上

と。これによりて西には西芳寺、東には常在光寺が、恆例として將軍の來り見るを待ち得たりしを知るべし。

常在光院は建武中足利高氏の建立なりしを以て、かくの如く特殊の待遇を得しなり。この寺慶長年中に相國寺中に遷されしが、もとは今の知恩院經藏の邊にありしなり。この寺の櫻のその寺と共に當時もてはやされしことは、日工集、東海瓊華集、翰林五鳳集、梅花無盡藏等に散見す。今五鳳集なる仁如の詩一首を錄す。

春日携諸子見常在光寺花

境隣鷲嶺與雙林、諸友相携春日尋、寶樹花多常在寺、群生遊樂古來今。

詩いたく拙なりといへども、實況をいへりとおぼゆ。

東山の花は常在光寺に限らず、今當時に名ありし所をあぐれば、鹿谷の北なる淨土寺、それより南にゆきて若王寺、粟田口なる白毫寺、太子堂、新黒谷さては青蓮院の東なる花頂山、つづきて鷲尾、又清水より歌の中山清閑寺に至るまで當時の記錄、詩歌の集に名ありと稱せられし所なり。

永享四年三月四日には將軍義教花頂山の花を見ることあり。寶德四年には將軍義政東山の花を見、寬正六年には義政左大臣として花頂山、若王寺の花を見ることあり。この寬正の花見の委曲は長祿寬正記に見えたり。その花頂山にての連歌、

咲みちて花より外の色もなし　左大臣義政

春の雪間か山の鳥の音　關白 教房

出初る月をかすみの上にして　三寶院門跡

同六日小原の花盛りとてここにも行き見たりといふ。これらの外、公卿、僧俗の花見の記事はことごとしくあげずもありなむ。

これらのうちにも鷲尾は鎌倉幕府の頃より名高き花所なりしが、この期にもまたその名をおとさず、盛なりしなり。今鷲尾と名づくる一種の花あるは或はこの地に生ぜしものなるべきか。

この外洛中には鷹司家の邸にも花あり、又二條なる常光寺には晩櫻ありて名高かりき。洛外には太秦また花の名所なりき。

花の下

花の下とは連歌の宗匠の稱號なり。はじめ連歌の道の興るや後鳥羽院柿の本栗の本と二樣に連衆を分ちてうるはしき連歌と狂れたる連歌とをまぜまぜに催されしことありしが、後いつしか花の本の稱を生じて、連歌の道の稱號とはなりぬ。げにや連歌の道にありては月と花とを最も重き景物として、百韻に花は必ず四を賦せざるべからず、しかもその花には定まれる座ありてこれより下に下すべからずとするなどそれぞれの式ありて必ず之を守れるものなり。

連歌の道は鎌倉時代より漸次に盛んなり、室町時代に入りては實に文藝界の一半を掌握し、宗祇の出づるに及びてその極に達しぬ。この時や和歌集の勅撰絶えはて、かへりて連歌集の勅撰あるに至りしを以てその一斑を卜するを得べし。かくて宗祇は花の下の稱號を勅許せられしと傳ふ。宗祇はかの西行に私淑して、常にかの「ねがはくは花の下にてわれ死なん」の歌をめでたりしが故にこの勅許をばいかばかりかよろこびけん。

宗祇の後宗長、肖柏あり、その後里村紹巴あり。紹巴の後裔世々連歌道の牛耳をとりて花の下と稱す。江戸幕府の連歌師數家ありしが、その本宗たる里村氏をかく稱するはこの故なり。

元龜二年細川藤孝洛西長岡に閑居の砌、連歌の宗匠數輩をかたらひ、かの大原野勝持寺の花の下に大に連歌の會を催す。會する人照高院道澄、三條西大納言、飛鳥井中將藤孝をはじめ、連歌師にては玄仍、昌叱、玄哉、宗仍等にして紹巴實にこれが領袖たり。幽齋の子熊千代(忠興)十三歳にして又席に列す。興行すること三日兩夜にして千句に餘れり。世に之を大原野十花千句といひて連歌道の規模とす。實に空前絶後の大會にてありしなり。その發句の一斑を次に示さむ。

何路第一

今日こそは花さかぬ松も小鹽山　白(照高院道澄)

かすみにきえし明ほのゝ雪　藤孝

何人第二

待つ心花や知けん今朝の雪　飛鳥井中將

何衣第三

月花に忘るばかりのうきもがな　紹巴

何舟第四

一木づつ身をし分はや花の本　心前

何山第五

玉簾おろさば花のあらし哉　英帖

二字返音第六

露ならで花ふさ重き盛りかな　宗仍

何垣第七

薫りきて花に夜ながし雨の中　玄哉

初何第八

木がらしを花にうらむる杉間かな　昌叱

何水第九

都人まちてまたるな山櫻　藤孝

唐何第十

袖ふれて花の香とりの宮居かな　三條西大納言

何人追加

しめの内の花にはよぎよ春の風　　了　玄

百韻毎に發句必ず花を詠ずること名所にての會たるを空しくせずといふべし。この時の懐紙今に傳はれり。その裝飾の美、筆蹟の麗、その宮の蒔繪の體今様のものにあらず、まさに國の寶としつべきものなるに、今の世連歌を解するもの殆どなく空しく之を措けるは惜むべし。われかつてその京都恩賜博物館に寄托せられてあるを閲して、眞に斯道の至寶たるを知りぬ。

花の謠ひ

連歌と共にこの時代の文藝界に大なる力ありしは謠曲なり。この謠曲のうちには花を詠ぜしもの少からざるのみならず、さらぬ曲にも櫻の名所又花の美をうたへるもの少からず。今そのうちの著しきものをあげむ。

上文に述べ來れる花の故事を骨子としたるは櫻町中納言を主とする泰山府君、上野岑雄を主とする墨染櫻等の曲なり。志賀の曲は志賀の山櫻に託して黒主の故事を詠じ、鞍馬天狗の曲は鞍馬の花見の事よりし牛若の故事を語る。これらはいづれも櫻を主とするものにあらずといへども當時の風尚を見るに足る。專ら櫻を詠ずるものは大かたそれぞれの名所をとれり。吉野天人の曲は都人の吉野へ花見に行きしに、天人の下りて花を讃する由をつくり、嵐山の曲は花見と共に花の德を述ぶ。小鹽の曲は大原野の花見を骨子とし、業平の靈に託して花の美をたたへ、西行櫻の曲は西山の西行庵の一木の櫻の美をうたへり。右近の曲を見れば、當時右近の馬場に櫻の並木ありて都人の花見にうかれし狀を見るべく、櫻川の曲は常陸國の花の名所をばうたへり。その人買に託するは殺風景なるに似たれど、當時交通の梗塞せしに際して遠く名所を探る事の容易ならざりし實況を反面に證すといふべし。凡そこの吉野、嵐山、小鹽山、鞍馬山さては西行庵、右近馬場遠くは櫻川、すべて當時の都人士の花の名所としてあこがれし勝地なるが、この外になほ東山清水の地主の櫻も名高かりしが如し。この事はそを專らにうたへる曲はあらねど、田村の曲にこれをうたひ、熊野の曲に至りては清水の花見を以て事件發展の舞臺とせり。

この地主の櫻は都人に最も親しかりしものと見え、當時の小歌を集めたる閑吟集に次の如き曲をのす。

地主の櫻は散るか、散らぬか。見たか、水くみ。散るやら、ちるやら、嵐こそしれ。

と。これまた一面花を讃するの詩なり。

さて、又能と伴ひて演ぜられたる狂言に就きて見るに、これまた櫻に關するもの少からず。そのうち櫻の作り物を舞臺に出して演ずるものとしては花爭、花盜人、花折新發意等を主とすべし。花爭は主と冠者とが櫻といふが正しきか、花といふを正しとするかにつきて諍をなし古歌を引きて論ずるもの、花盜人は花見に來たるものが大なる枝を折り、主に見つけられて縛られしが、その獨語を聞きて主が興を催し、共に酒を飲み謠ひ且つ舞ひてその咎を容せることを趣とす。花折新發意は寺の住持が外出せむとして花見は禁制なれば如何に請ふものありとも許す勿れと命じて出で行きしに、果して四五人の人來て花見を許されむことを請へど、新發意は斷りて入れず。さらば遠くより眺めむとて垣根の外にて酒の興を開くに、新發意は酒好なれば、神酒は花にも上げよとて、自らも一杯飲み酩酊して、客のいふままに彼の枝此の枝と折り與ふる時に住持歸りてここに破綻となる趣なり。

旅路の花

櫻をめづる志の深きものの旅路を花に明し暮すことこの頃よりやうやう見え初めぬ。明應の頃の歌人基佐といふものわざと花見に吉野に往きしことあり。その集にいはく、

芳野の花ざかりなる頃二三人うちつれてまかりて、終日詠め暮して、

芳野山花の盛は寒けくて
　みるから雪の心地こそすれ

共に往きける常之入道のよめる。

芳野山かつちる櫻袖とめて

はらへば花の雪にまがへり

その往返共に花を訪ふを忘れざりしは勿論の事なるべし。されば、奈良にて南圓堂の花の盛をよみたる歌も殘れり。

稱名院前右大臣公條も天文二十二年二月廿三日都を立ち連歌師紹巴と打ち連れて吉野に花見に赴きしことあり。その途次にかの眉間寺の絲櫻の盛りを見しなり。その他泊瀬寺、橘寺、高間寺の花を賞しつつ三月五日にこそは吉野に到りけれ。今その記を見るに、當時の吉野の櫻のさま思ひやられてゆかしさ限りなし。この行、歌あり、連歌あり。五日の夜吉野にての兩吟百韻あり。その發句脇句次の如し。

もろこしのよしのか花におくもなし　紹巴

おなじかざしの櫻いくもと　稱名院

この時の記事にいはく、

あたりをみれば立願にて花の木どもうへてまいらせけるよし申せしに、百本の內と札つけたる木其のたけ、二尺餘りなる木ども、今みとせ四とせの中には盛の花の木たるべきよし思ひやりて云々

と。これを以て、その木を植ゑ繼ぐ事の古くより行はれてその名勝の名と實との長く傳はりて斷えざりし所以を知るを得む。

同じ人翌二十三年には、比叡山三塔巡禮の望みを起して、嵯峨二尊院の良紀長老を伴ひて、登山し、東塔南谷榮光坊に着きけるが、はしなく坊主宣祐法師の櫻をめづる心ざしの淺からぬを世に傳ふることとなりぬ。その記に曰はく、

扨も此法印の心ばへ、世俗の塵をはなれ、前栽にのみ心を盡して、かの田遊岩が泉石膏肓ともいひつべし。中にも春の花に心をうつし、櫻の木あまた植ゑならべて、日毎に心經を一々によみて花木の祈念とせられけるとなん。昔櫻町中納言は花の盛り日數を延むとて春は泰山府君を祭らせ給へる心とぞ覺えし。しかしながら、草木國土悉皆成佛の理にや。

花を尋ねて去年芳野に赴きし人の眼には如何に殊勝に思はれけむ。わが國人の花を愛する至情往々ここに至ること古今一轍といふべし。

文明十八年六月、道興准后都を出でて、北陸より東海東山の旅に赴きしことあ

り。そが紀行を廻國雜記といふ。この行もとより花見むとにはあらざりしなるべけれど、花あれば、徒にすごすことはあらざりき。翌年花の頃甲斐國より下野宇都宮を經て處々に花を賞しつつ、白河關に至りしが、名にしおへる所なれば記事稍こまかなり。いはく、

白河二所の關に到りければ、いく木ともなく山櫻さきみちて、心も詞も及び侍らず。暫く花の陰に休みて、

春はただ花にもどせよしら川の

せきとめずともすぎんものかは

おなじ心をあまよみ侍りける中に、

しら川の關のなみ木の山櫻

花にゆるすな風のかよひぢ

これらの外正廣日記には遠江の西山寺にて木の下にたえず雨ふるといふ櫻ありて、

はるる日にいかなる雨ぞ花の雪

空にしられぬ櫻木のかげ

とよめるあり。宗牧の東國紀行には小田原にて花見しことを載す。いづれも事多ければ略しつ。

不斷櫻

永祿十年春、連歌師紹巴が東國に下りし紀行あり。富士見道記といふ。その伊勢の記事中に、

白子觀音寺に不斷櫻とて名木あり。

と見ゆ。この白子觀音の不斷櫻は古より名高し。この櫻につきてははやく宗祇の之を詠ぜる發句あり、曰はく、

冬さくは神代も聞かぬ櫻かな

なほこの外に名高き句は

花いつは葉さへ冬なき櫻かな　宗長

後ぞ見ん春はこと木の詠かな　紹巴

等なりとす。

この櫻につきては和漢三才圖會にも

白子觀音寺……寺內有櫻樹、每年四時開花、稱不斷櫻名木也

と記せるが、その土地にての傳說を記せるものには勢陽雜記、勢陽五鈴遺響、伊勢參宮名所圖會あり。次には先づ三重縣植物誌にいふ所を記す。

河藝郡白子町寺家、白子觀音境內古幹二本、高各約4m 目通周1.3m餘1m未滿、他に新幹七八本。（大正十二年三月七日、內務省天然記念物指定濟。）

此櫻は、さとざくらの一品種で——花軸頗る長き特徵あり。

春季以外に多少開花する性あるが故に、昔から名高い。當寺院は藤原不比等が、聖武帝の勅を奉じて建立せし勅願所と稱せられ、天平勝寶年間の建立と云はれ、又稱德天皇禁庭に召され云々より計算せば、樹齡は正に、一千百七十餘年なるべきも、櫻の樹齡は、林學上五百年を限度として居る。蓋し現在のものは、其孼より成長したものに相違ない。因に當觀音は、一に子安觀音とも云ひ、妊婦安產を祈願するので、この櫻の葉は安產の守札に添へて、「御葉附いてふ」と同じやうに信者に頒たれる。

諸國里人談に曰はく、

觀音堂の前に一木の櫻あり、四時に花開き、盛花の如くには非ず、花蔭に五七輪の花不絕。當寺子安觀音と稱して、靈驗世に知る處なり。此御影を產所に安置すれば、安產ならしむ。此寺家村一鄉は、孕女五月帶をせざるを昔より今に以て變せずと云云。但諺云、寺堂より產帶及櫻葉を添て授く。請得て見るに、胎兒男子は葉の背を見る、女子は葉面を見ると云ふ。——余親見するに、奄藝の郡境海濱の地は、冬月至て南北にして溫暖なり。故に春月は更なり、極寒の候と雖も、稍く溫和に促されて纔に花を發せり、所謂かへり花と云ふが如し。又夏月至て炎暑の候は見ることなし、春秋冬の三時にあり。然れども春時に及ばず、纔に花を生ずるなり。蓋一奇とするは冬月嚴冬の候に、其葉は稍く落つと雖も、他邦の櫻と異にして、半は其葉を墮すことなし。是一種のものなり。凡て奇異は神佛に託して其信を發す、方便とするは彼

門の常譚なり云云。

この不斷櫻を題材としたるものに、謠曲不斷櫻あり。これ不斷櫻のいはれを說くと共に、かねて此寺の緣起にも及べり。作者不詳、舊くより觀音寺に傳はれるものにして、貞享三年版の觀世流二百番外百番の三として載せたれば、その流布は、久しきものと思はる。次にその文を記す。去る大正十二年四月の當山開帳大法會に際し、折から史蹟天然記念物指定の記念かたがた、觀世喜之師の校訂を經たるものなりといふ。

前シテ　漁翁　ワキ　勅使　後シテ　不斷櫻の精

ワキ（三人）次第「都を思ひ立つ春の、〳〵、日も行く末ぞ長閑けき。詞「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても勢州白子山觀音寺の花、四季に咲く由君聞しめし及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り、唯今伊勢路の旅に赴き候。道行「春霞、都の空を隔て來て、〳〵、浪路はるばる漕ぐ船の、志賀の浦風靜にて、末に三上の山越えて、行けば程なく鈴鹿路や、八十瀨の浪も音高き、鼓の浦に着きにけり、〳〵。調「急ぎ候程に、之ははや音に聞し鼓の浦に着きて候。

暫く此所に逗留し、宣旨の如く花を詠めばやと存じ候。シテ一セイ「君が代にいつも櫻の花なれば、松もみどりの色添へて、幾久しさも限らじな。シテ「されば此や大悲の光色添ふ故か、吉野山千本の花を植うると雖も、絕えず櫻の種はなきに、此一本に限る事、これぞ佛の誓とかや。下歌「神と君との道すぐに歩をはこぶ此寺の。上歌「花鳥の、いろ香にうつる春の日の、〳〵、小籬の隙より眺むれば、末白雲に歸る雁、聲たて添ふる浪の音、かすかに浮ぶ海士小舟、誰か心を乘せざらん、〳〵。ワキ詞「里人を相待つ所に、老人一人來りたり。そも汝はいかなる者ぞ。シテ詞「さん候これは此浦の海士にて候。ワキ「海士ならば浦に出で、おのがしわざを營むべきに、花の本に立ち寄り、用ありげに見え候こそ不審に候へ。シテ詞「仰せ尤に候さりながら、我も賤しき身なれども、釣の暇のをり〳〵は、立寄りて花の蔭を清め候。ワキ「あら何となや、心ある人はさもこそあれ賤しき海士の身にて、花をもてあそび候事、げに優しう候へ。シテ「御姿を見奉れば、都の人と見申して候が、御言葉とも覺えぬもの哉。姿こそ山のかせきに似たりとも、心は花になさばなりなんと、ふるき

詠はいかならん。ワキカヽル「げにげに之は理りなり。貴賤によらぬ心の花の。シテ「咲くや櫻の言の葉の、多き中にもある詩に曰く、カヽル「遙に人家を見て花あれば。ワキ「即ち入る。地上同「貴賤と親疎を論ぜざるは、春の情と聞くものを、田舎にもまた都人、姿言葉はかはるとも、心ひとしく花に一夜を明さん。ワキ同「猶々當寺の御來歴委しく御物語り候へ。クリ地「そもそも此寺と申すは聖武天皇の御願、淡海公の造り給ひし寺なり。サシ「しかれば代變り時移りて。地「寺の炎燒せし時に其の灰の中より一本の櫻生ひ出でたり。程なく葉を垂れ枝をならべ、いつも櫻の咲くゆゑに、不斷櫻とは申すとかよ。クセ「その後稱徳天皇の御宇かとよ、絶えず櫻の咲く事を、君聞しめされつつ、度々の勅使ありて、都に移し植ゑ給ふ。雲の上人と、りどりに、色にそみ香にめでて、南殿の御遊淺からずこそは覺えけれ。然るに春宵一刻の盛をなし、一夜に枯れて見えければ、帝不思議に思召し、御製をなされ再び返し給ふぞありがたき。シテ「誓ひあり。いつも櫻の花なれば。同「見る人さへや常磐なるべしと、詠じ給ふぞかたじけなき。猶も奇特を都人、月の夜すがら待ち

給へと云ひすてて花の木陰に隱れけり、〳〵。（中入）ワキ上歌「嬉きかなや、いざさらば、〳〵浦風までも心して、枝をならさぬ櫻木の、蔭に一夜を假枕、夢の告をも待ちて見ん、〳〵。後シテ「それ月に能照の念なく、花に所開の思なし。暖風より開き、同じく暮春の風に散り、大慈大悲の誓ありて、いつも櫻の花なれば、見る人さへや常磐なるべし。とめて始めて都人に、言葉をかはす花の緣に、ひかれて現れ出でたるなり。ワキ「不思議やな白髮したる老人なれども、顏は二八にもたらず見えけるが、其樣けしたる姿にて、櫻の花の木蔭より、あらはれ給ふ御身は、さていかなる人にてましますぞ。シテ「今は何をかつつむべき。これは老せぬ櫻の木の、いつも盛の花の精。ワキ「何故こゝに來れるぞ。「今宵の雲の上人とも、覺えぬ事な宣ひそ。遙々これまで來り給ふ、勅使にてはましまさずや。もとより所は音高き、鼓の浦にて夜もすがら、舞樂をなして慰めん。よく〳〵此由奏し給へ。ワキ「げに理りを聞くからにかやうの不思議にあひ竹の。シテ「世々の治るしるしとて。ワキ「奇特を見るもひたすらに、唯これ君の御威光。シテ「あまねく潤ふ雨露の惠。ワキ「受

る國土の。シテ「草木までも。地「ありがたや、此君の、〳〵、長き世々のためしには、花ものいはぬ草木なれど、影唇を動しつゝ、とるや調子を松風の聲、鼓は磯うつ浪の音。(樂)シテ「おもしろやをのづから、四季をり〳〵を目の前に。地「あらはしぎぬの色添へて、〳〵、雪をうけたる花の袖、返すも面白や。キリ「所は鼓の浦なれば、〳〵。寄りては浪のどうとは打ち、かへりては又打つ、音樂の聲虛空の響き御空に花降り異香薫じ、五日の雨は國土を潤し、十日の風時をたがへず、草木成就し君も豐に民榮え、〳〵、治る御代こそめでたけれ。不斷櫻又常磐櫻ともいふ、所々傳ふるものありといへどこの白子觀音のものの如く古くして正しく傳はれるは少し。

芳野の花見

花は櫻木人は武士とは誰がいひ初めし言の葉ぞ。げにも戰國亂離の巷に朝の露消えを爭ふ武士も花をめづる風流は忘れざりけるなり。天正十年織田信長武田氏を亡して凱旋し、四月駿河に出で、府中にて、昔今川氏の古跡とて千本の櫻ありしをくはしく尋ねて訪ひけり。かかる風流は今川氏に限らず、はた信長に限らざりける、わが國人のおのづからの性情なり。

さても信長の遺業は豐臣秀吉によりて完成せられ、天正十八年小田原を平げて後海內全く一統に歸し、はじめて太平の頌を實にするを得たり。かくて間もなく明、朝鮮に兵を出すの令ありて天下また匆劇の事ありといへども、國內は風枝を鳴さぬ御代にてはありしなり。ここに明使來りて和を請へる年の翌、文祿三年春二月に豐公芳野に赴き花を見ることあり。

抑も吉野の花見はかの三條西公條の花見あり、また謠曲の吉野天人にてしるきが如く、遠く都より來りて興ぜしことは今にはじめぬことなれど、さばかり一天下をくつがへすばかりの大規模の事はあらざりしなり。二月二十五日に大阪を立ち二十七日に吉野に着きぬ。

この時豐公のいでたちは例の作り鬚に眉作らせ鐵黑なり。伴へる人々は關白秀次、右大臣晴季、准三后道澄、大納言輝資、權大納言親綱、權中將雅枝等をはじめ

武家には家康、秀家、利家、秀俊其他名ある人々を盡し、紹巴、昌叱等の連歌師も亦之に加はれり。いづれも我れも〳〵とわかやぎたる裝をなし、行粧美を盡せりといふ。

六田の橋より千本の櫻、花園、櫻園、ぬたの山、かくれがの松などを巡り覽て、豐公かくぞよめる。

吉野山梢の花のいろいろに
　おどろかれぬる雪のあけぼの

關屋の花の下にて、

芳野山誰とむるとはなけれども
　こよひも花のかげにやどらむ

他の人々の歌あまたあるがうちに、昌叱が歌

答へせぬ花にぞとはむよしの山
　むかしもかかる春にあふやと

其の後藏王堂に參詣し、櫻が嶽、後醍醐天皇の皇居の跡などを拜し、吉水院を旅館として兩日逗留あり。諸侯大夫諸士各許されて心のままに花を覽る。二十九日に歌會あり。題は花の願、不散花風、瀧の上の花、神前の花、花の祝の五首とす。その當時の懷紙今傳へて伊達伯爵家に藏せり。その秀吉の詠は、

はなのねがひ

とし月をこゝろにかけしよし野山はなのさかりをけふみつるかな

はなをちらさぬかぜ

こゝろある風はふかじなよしのやまはなのさかりを雪と見るまで

たきのうへのはな

たきつなみくだすいかだのよしの川こずゑにのこせ花のやまかぜ

かみのまへのはな

春はなを神のめぐみのあるゆへにまうでてみるやみよしのゝ花

はなのいはひ

をとめこが袖ふるやまに千とせへてながめにあかじはなの色香を

と。その他關白秀次、右大臣晴季、權大納言家康、參議左近衞中將秀家、參議左近衞

權中將利家侍從政宗法印玄旨法眼紹巴法橋昌叱等總じて二十紙ありとす。

さてその翌日又山上の花をめぐり見て上の藏王宮にてよめる歌、

かへらじとおもふ家路を入あひの
　鐘こそ花のうらみなりけれ

かくて下山の後高野に赴きて二親の菩提を吊ひぬ。後に大村由己をしてこれらの事に因みて五番の謠をつくらしめぬ。その一に芳野花見といふあるは卽ちこの度の事を叙せるなり。

醍醐の花見

醍醐の櫻會の事は上に述べたり。この櫻會は久しくつづきて行はれしが天下大亂に及びては或は行はれざりしならむ。されど正平元(貞和三)年に足利直義がここに花見せしことなど次々に行はれて花の名所なりしことはかくれなかりしなり。

慶長二年三月八日豊太閤たまたま家康等と共に醍醐に遊びその形勝に感じ再遊を期したり。翌三年二月再び遊びて三月を期して大規模の花見を催さんと企てぬ。こは北政所その他奥殿の女房達を慰めむとするにありしものなるが又幼兒秀賴に見せむの下心もありて思ひ立ちけるなるべし。

この花見の規模の大なりし事は先づ醍醐寺の堂塔殿舍の修築を施し次に寺の馬場よりやり山まで三百五十間の間に近國の名花を集め植ゑしめ醍醐より伏見までの道路には埒を結び院外五十町四方は三町毎に番所を立て二十三箇所に警固所を設けたるにて一斑を見るべし。

かねて三月十五日は其の日と聞えしが十三日に風雨俄かに來り翌日も密雲深く鎖していつ晴るべしとも見えざりしに當日に到りては所謂照りもせず曇りもはてぬ花見日和となりしかば人皆太閤の威光と祝しけりとぞ。この日の催は太閤主人にして北政所等以下女房達客たれば、いづれも粧を凝して出で立てたるさま花とその美を競ひけり。三寶院をやどりとし、これより寺々の名花、所所の花園まで道の左右に埒を通し五色の緞子の幔をうち秀吉北政所以下徒

歩にて練り行くありさまの美々しさいふもおろかなり。

園中には一番より八番まで、茶屋を構へて、各亭主の饗應あり。その催また心の限りを盡したりと傳へらる。一番は益田少將の茶屋、先づ一獻をすすむ。二番は新庄維齋の營、松杉の下蔭にて御茶を獻す。三番は小川土佐守、傀儡などの催しあり。四番は增田左衞尉、行水、午餐の設美をつくせり。五番は前田德善院大やうなるさまにしてかへりて趣ありと賞せらる。六番は長束大藏大輔承る。晩に及べるを以て御膳の設あり。ここにて各裝束をかへ和歌の會あり。その時の短冊今に傳りて國寶となれり。所所よりの獻物多くはここにて下行せられたり。七番は御牧勘兵衞、八番は新庄東玉承る。いづれも今の園遊會の狀に似たり。

この時の壯麗筆紙に盡すべからず。太閤一代の榮華これに盡きたりといふべし。かくて三寶院に報ゆるに新知千六百石を寄附し、秀賴よりは銀子二百枚小袖十重、北政所より鳥目百貫精絲二十疋、その以下の人々の寄附一々之をあぐべからずといふ。

かくて不世出の英雄秀吉もこの享遊を最後として三ヶ月の後には遂に起たずなりぬ。一榮一落眞に花の如きかな。

護花鈴

醍醐の花見の催に四番の茶屋は增田長盛なり。この所のもてなし、至れり盡せりの觀ありしといふ。茶屋を立ち出づれば、東なる谷に紅の絲にて太く打ちたる綱を長く引はへ、鈴をあまた所につけ花に集まる鳥を追ふしつらへありしは心ききたる設なりといたく賞せられしとなむ。これ卽ち護花鈴の設けにしてその源は支那にあり。天寶遺事に、

天寶初、寧王日侍好聲樂風流蘊藉諸王弗如也、至春時、于後園中結紅絲爲繩、密綴金鈴繫于花梢之上、每有鳥鵲翔集、則令園吏掣鈴索以驚之。蓋惜花之故也。

諸宮皆效之。

とあるを、わが櫻などにも應用せしなり。

文明頃の連歌師猪苗代兼載の發句に、

鳥はなし、嵐につけよ花の鈴

とよめるも亦、この護花鈴をよめるなり。花の鈴又花の鳴子ともいふべし。

閑吟集の小歌にまた次の曲あり。

上林に鳥がすむやら花がちり候。いざさらば鳴子をかけてとりおはう。

これ當時護花鈴の設けの行はれしを證するものにして花を愛する情掬すべし。古代の護花鈴の今に傳はれるもの往々見ることあり。花を愛する我が黨の士はまたこれにつきても多少の注意を費さざるべからず。

武人と櫻

諺にいはく「花は櫻木人は武士」と。この諺は何時生ぜしものぞ。戰國の擾亂時代に於いて國民の精銳は武人としてのみあらはれたり。ここに於て武人は日本人の代表たる如き觀を呈し、櫻花は國民の精粹たる武人と對比せらるるに至れり。げにも武人と櫻花とは深き緣を結べるを見る。

加藤清正は近世武人の典型として今なほ人口に膾炙す。慶長十五年二月德川家康諸將におほせて名古屋の城を築かせたる時清正もこの役に就けり。かの名高き金の鯱を揭げたる天守は卽ち清正の築ける所なり。清正時に萬松寺に宿りき。萬松寺には名高き櫻の老大木ありき。清正巨大なる石材を宮卽ち熱田より引きける時華美なる服裝せる美少年數人をその上に坐せしめ、自らも亦異樣なる服裝にて石の上にのぼり大音聲にて木遣歌をうたひ家人數千人してこれを引かしめしに、見る者雲の如し。卽ちそれらの者にその値を問はずしてその持てる物を購ひしかば、諸人ことごとくその業を棄てこれを引きしかば、忽にしてこれを普請場に運びけりといふ。これによりて俚諺あり。

およびなけれど萬松寺の花を折りて一枝ほしうござる

と。蓋し、小姓の美少年を萬松寺の櫻花によそへたるなり。清正かつてその封地熊本なる龍田社の側に舊主豐臣秀吉の祠をつくりて櫻を植ゑしが、花時には來り觀る者雜踏せりといふ。